第２章
高校生の進路意識と大学選択行動

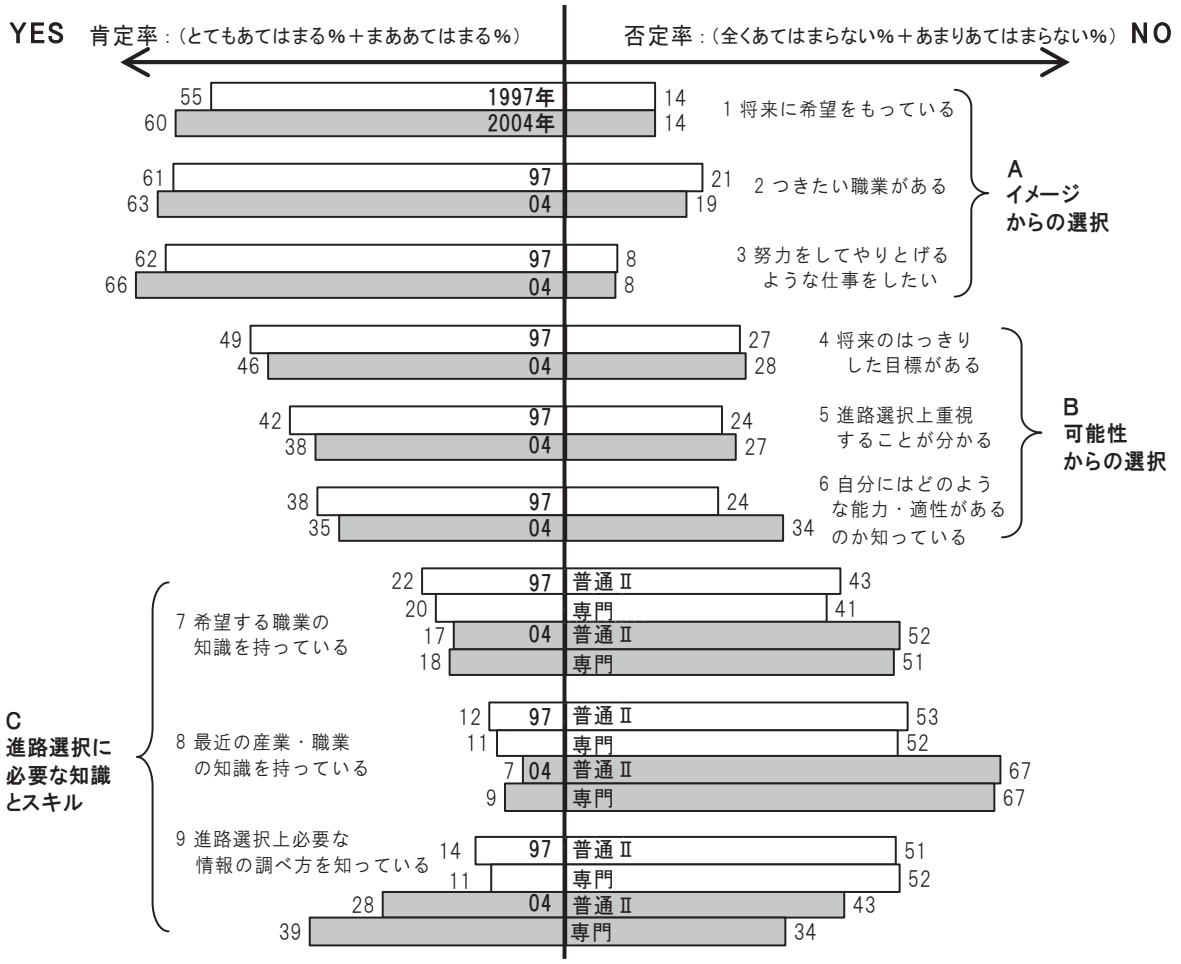
第1節 高校生の意識変化と高等学校の進路指導

1. 高校生の将来展望に関する自己概念 ― 1997年との比較

1997 年と 2004 年の調査から、高校生の将来展望に関する意識の変化を**データ２－１**に示した。それぞれ高校２年生を対象に調査したもので、**普通Ⅰ**、**普通Ⅱ**、**専門**の学校類型（類型の基準は章末参照）間の比率は同一に調整している。

「１将来に希望をもっている」「２つきたい職業がある」「３努力をしてやりとげるような仕事をしたい」などの項目は比較的肯定率が高い(2004 年の結果では 60～66%の生徒が肯定している)。一方で、「４将来のはっきりした目標がある」「５進路選択上重視することが分かる」「６自分にはどのような能力・適性があるのか知っている」などの項目については、肯定している生徒はいずれも

データ2－1 高校生の将来展望に関する自己概念（高2生 1997 年 vs2004 年）



1997年：「高校生の自己理解と進路展望」1997年11～12月　高２　n=7,957（普通Ⅰ＝4,145, 普通Ⅱ＝3,177,専門＝635）

2004年：以下の各調査を、1997年調査の類型別構成比（普通Ⅰ＝52.1%、普通Ⅱ＝39.9%、専門＝8.0%）に準じて合算集計した値。 //普通Ⅰ「学習活動の検証に関わる共同研究」2003年11月(高２) / 普通Ⅱ・専門「高校生の進路意識と学習行動に関わる共同研究」2004年６～7月(高２) n：普通Ⅱ＝2,233、専門=1,062 / 「Ｃ進路選択に必要な知識とスキル」は、「普通Ⅰ」のデータなし。 / 学校類型（普通Ⅰ、普通Ⅱ、専門）は章末に掲載。

50％未満であり、30％前後の生徒は「あてはまらない（あまり・全く）」としている（残りは「どちらともいえない」）。

前者の３項目は、やや抽象度も高く「将来の自分」に対する漠然とした期待やイメージによって回答することができるため、**Ａイメージからの選択**というカテゴリに区分した。他方、後者の３項目は「今の自分（自己理解の程度）」に基づいた自分なりの進路選択に関する意志がなければ肯定できない。自分にとっての実現や選択の可能性に踏まえた自己概念と考え、**Ｂ可能性からの選択**というカテゴリに区分した。

● 1997 年と 2004 年の比較

1997 年と 2004 年を比較すると、**Ａイメージからの選択**の３項目については、それぞれ肯定率が３～５ポイント程度伸びている。対照的に、**Ｂ可能性からの選択**の３項目については３つの項目とも肯定率が３ポイント程度下がっている。特に、「６自分にはどのような能力・適性があるのか」分からない生徒は 1997 年の 24％から 2004 年では 34％と 10 ポイントも増えている。

Ｃ進路選択に必要な知識とスキルについては、「９進路選択上必要な情報の調べ方を知っている」生徒が、この７年間で大幅に増加したことが分かる（**普通Ⅱ**14％→28％、**専門** 11％→39％）。インターネットの普及や高等学校での「調べ学習」的な要素を含む進路学習の拡大がその背景にあるだろう。しかし、それとは裏腹に「７希望する職業についての知識」「８最近の産業・職業の知識」を持っていないとする生徒は、それぞれ 1997 年に比べ 10 ポイント以上増加している。

整理すると、

- 進路情報へのアクセスは容易になってきている。
- 将来に対して悲観的な生徒が増えているわけでもない。

一方で、

- 産業や職業に関する具体的な知識が分からないとする生徒は 1997 年時点で 50％を超えていたが、2004 年では更に 67％まで増えている。
- 自分の能力・適性（自分らしさ、自分のよさ）が分からず、進路選択の基準を持ちにくい生徒が増えている。

などの課題が確認できる。

実社会の本物（人、経験）から学ぶ機会や、困難を乗り越えて他者や社会に役立てる体験(自己効力の獲得)をキャリア教育の一貫として配置することなどが、これらの課題解決に有効なのではないだろうか。

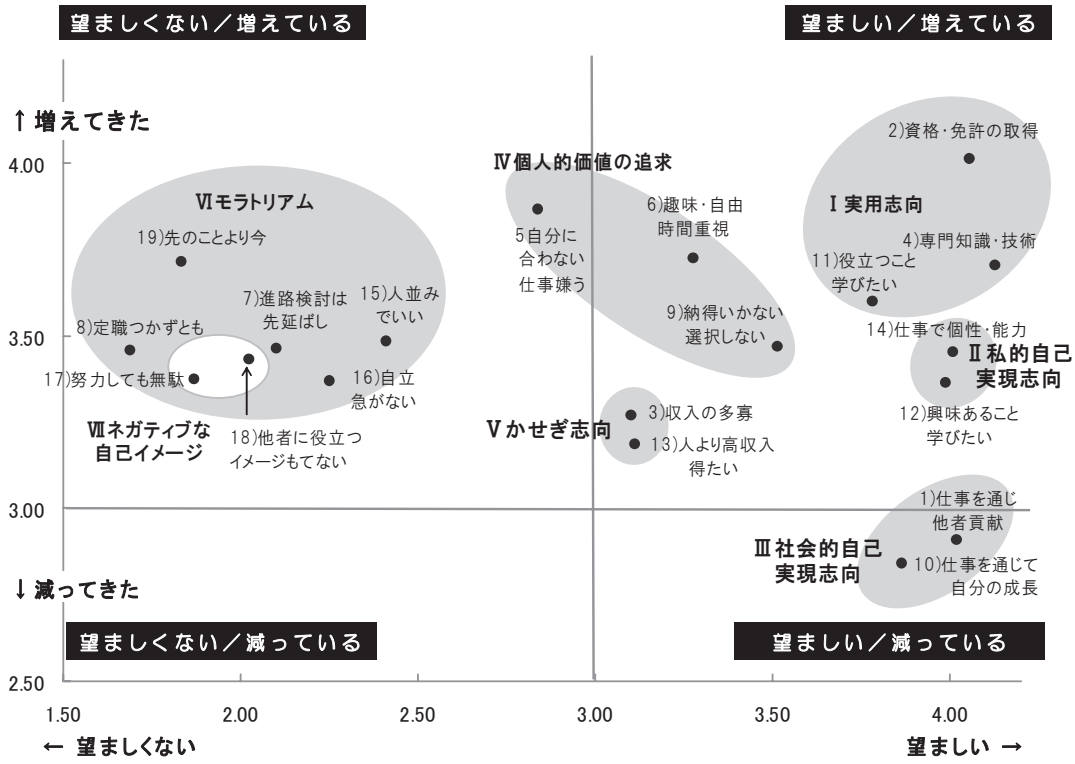
2. 教師が感じる生徒の価値観変化

データ２－２は、高校教師（進路指導担当）を対象に「指導を通じて感じる最近の生徒の価値観」について調査したものである。

縦軸には「どのような価値観を持つ生徒が増えてきたか（増減）」、横軸には「その価値観は先生から見て望ましいと思えるものか（望ましさ）」を取り、各項目の値をプロットした。さらに、因子分析の結果も参考に、Ⅰ～Ⅶの７つのカテゴリを設けた。

高校教師から見て「望ましい」と思える価値観（横軸に数値が大きい項目）は**Ⅰ実用志向（役に立つ）**、**Ⅱ私的自己実現志向（個性・自分らしさ）**、**Ⅲ社会的自己実現志向（成長と社会貢献）**などであり、反対に「望ましくない」とされたのは**Ⅵモラトリアム（自己決定の先延ばし）**や**Ⅶネガティブな自己イメージ（どうせ自分なんて）**である。一方、**Ⅳ個人的価値の追求**や**Ⅴかせぎ志向**は「どちらともいえない」を意味する 3.00 付近に平均値がある。

データ2－2　高校教師が感じる生徒の価値観の変化



指導をしていて感じる最近の生徒の価値観／「当てはまる生徒が増えてきたか」「教師から見て望ましい価値観であるか」のそれぞれについて5件法で回答。数値は、3.00を基準とする平均値。
ベネッセ教育総研「高等学校の進路指導に関する意識調査」（2004年6・7月）進路指導担当高校教師 n=1,765

該当する生徒が「増えているか」については、**Ⅰ実用志向**の各項目の値が 3.60～4.01と高く、高校教師がこの調査項目の中で、最も「増えている」と感じているカテゴリである。また、自己実現志向（仕事や学びの中で自分を活かす）の中でも、自分の興味や個性の伸張を重視する**Ⅱ私的自己実現志向**の平均値は3.4前後であり、「増えている」と感じている先生方が多い。この２カテゴリは、先生方の「望ましい」という想いと、生徒の実態として「増えている」感覚とが合致しているようである。**Ⅳ個人的価値の追求（公的な価値観よりも私生活に重きを置く）**についても「増えている」とする度合いは高く、**Ⅰ実用志向**に次ぐ。

一方で、社会の中で自己の役割を果たそうとする**Ⅲ社会的自己実現志向**は、「望ましい」とする数値は高いものの、当てはまる生徒が「増えてきている」かについては基準値である3.00を切っており、減っていると感じている先生方の方が多い。先生方の「願い」と生徒の「実態」にギャップが見られるカテゴリと言える。

高校生は、「自分にとっての居心地の良さ」を追求したがったり、「自分らしさや個性の伸張」を図りたい気持ちは強いものの、「社会において自分が果たす役割」、つまり役割期待に応える意識が低くなってきていると先生方の目に映っているようである。

社会的な自己実現を図るためには「自分にとっての価値」と「社会から求められる価値」の結節点を探り、実現可能な（手の届きそうな）目標設定を行い、その時点で設定した目標の実現に向けて挑戦していく必要がある。しかし、**データ２－１**で見たように、社会で求められる価値を追求するためのレディネス

を備えた高校生（「７希望する職業の知識」「８最近の産業・職業の知識」を持っている）は１～２割程度に過ぎない。さらに「自分にとっての進路選択の基準」が持てない（「５進路選択上重視すること」「６自分の能力・適性」が分からない）生徒は３割前後であり、1997年と比べ増加傾向にある。高校教師の認識はこの生徒実態を反映していると言えるだろう。

また、「望ましくない」とする先生方のほうが多かった**Ⅵモラトリアム、Ⅶネガティブな自己イメージ**の各項目に当てはまる生徒の増減については、3.4前後の項目が多く、やや増加傾向にあると認識されている。

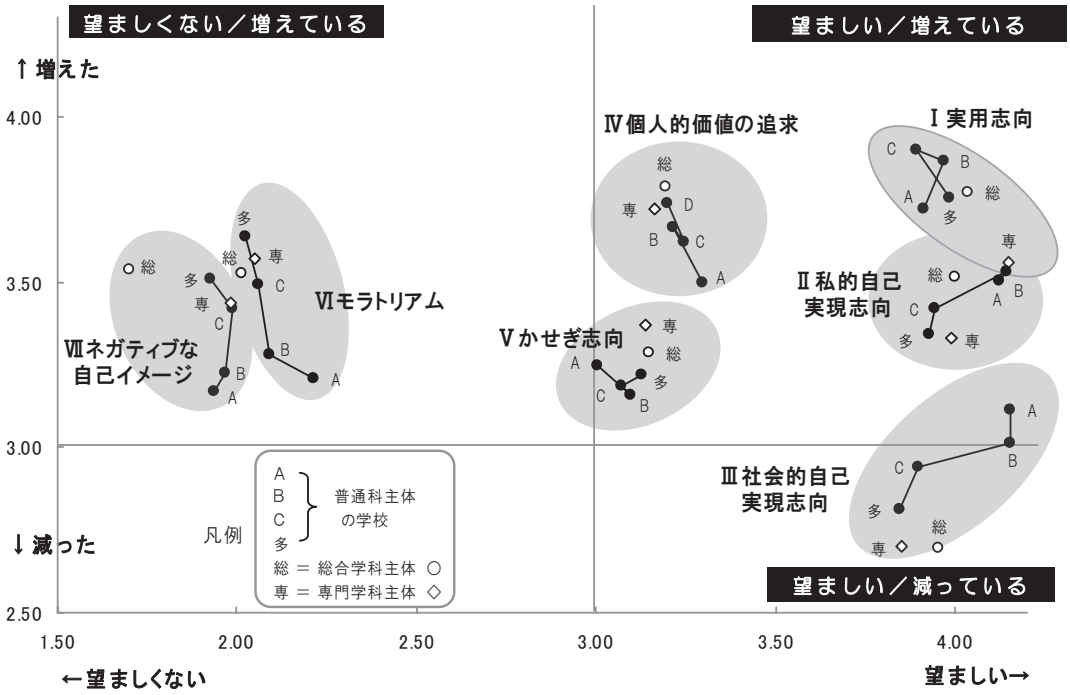
● 学校類型による違い

学校類型による違いを**データ2－3**に示した。傾向を単純化して把握するために、項目別の値ではなく**Ⅰ～Ⅶ**の各カテゴリの平均値をプロットしている（学校類型の設定基準は章末参照）。

注目したい点は**Ⅲ社会的自己実現志向**である。「望ましい」とする度合いに学校類型間で大きな違いが見られる。進学重点校A、B群（普通科Ⅰ）の値が高く、その他が相対的に低い。加えて「増えてきた」かどうかについても、全体の平均値は3.00を下回っている（「減っている」とした先生方のほうが多かった）のだが、普通科Ⅰに限ってみるとわずかながら3.00を上回っている。普通科Ⅰの学校群では、総合的な学習の時間の中で進路学習の体系化を図った学校が多いため、生徒の人間的成長に手応えを感じている教師が相対的に多いのではないだろうか。

一方、**Ⅵモラトリアム**や**Ⅶネガティブな自己イメージ**については、普通科Ⅱ（進学重点校C群、進路多様校群）や総合学科、専門学科で「増えてきた」とする回答が多く、普通科Ⅰの学校群で相対的に少ない。

データ2－3　高校教師が感じる生徒の価値観の変化（学校類型別）



指導をしていて感じる最近の生徒の価値観／「当てはまる生徒が増えてきたか」「教師から見て望ましい価値観であるか」のそれぞれについて5件法で回答。数値は、3.00を基準とする平均値。Ⅰ～Ⅶの各カテゴリの平均値をプロット。
ベネッセ教育総研「高等学校の進路指導に関する意識調査」（2004年6･7月）進路指導担当高校教師 n=1,765

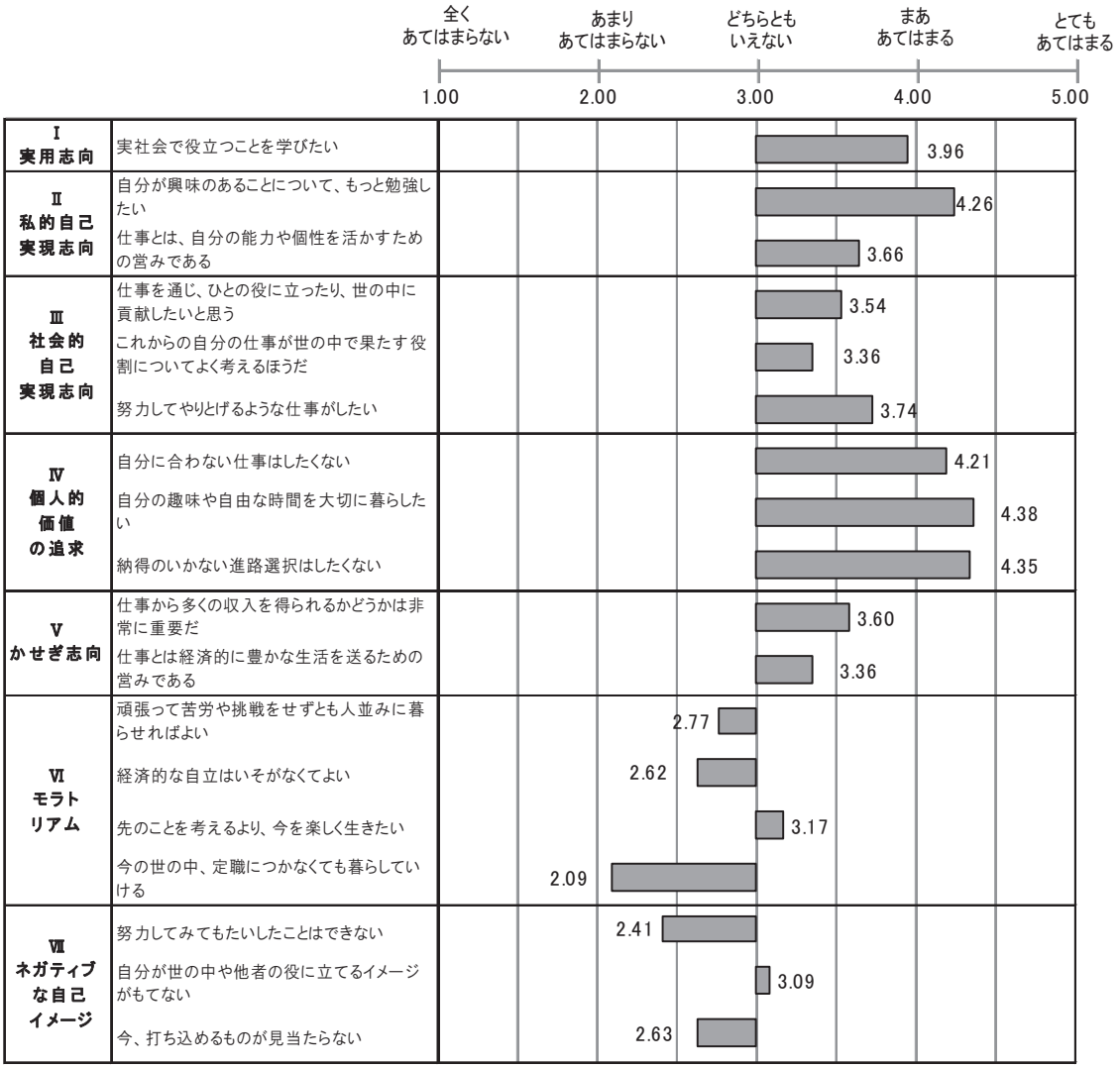
3. 生徒たち自身の価値観

データ２－４は、高校生自身の回答による価値観に関するデータである。なお７つのカテゴリは**データ２－２・３**と同じものを設定したが、質問項目の一部は異なる。また教師調査では「増減」と「望ましさ」について質問したが、生徒調査では「自分の考えとしてあてはまるか否か」を質問している。

● 「自分らしさ」にこだわりたい

18 項目の中で回答者の平均値が最も高いのは、**Ⅳ個人的価値の追求**に分類した項目群（「自分に合わない仕事はしたくない(平均値4.21／肯定率82.4%、以下同様)」「自分の趣味や自由な時間を大切に暮らしたい（4.38／89.9%)」「納得のいかない進路選択はしたくない(4.35／86.9%)」）である。「自分らしさ」にこだわりを持ちたいというのが高校生に特徴的な傾向の１つと言える。しかし、**データ２－１**で確認したように、「自分らしさ」についてはよく分からずに自信が持てない生徒も増えており、ジレンマが発生しやすい状況にあるとも考えられる。

データ2－4 高校生のキャリア形成に関する価値観



ベネッセ教育総研「高校生の学習行動検証に関わる共同研究」（2004年11月）高2 n=2,950
数値は5件法の平均値（5＝とてもあてはまる、1＝全くあてはまらない、3.00基準）

● 興味のあること・役に立つことを学びたい

次いで、数値の高いのが「自分が興味のあることについて、もっと勉強したい（4.26／84.4%）」「実社会で役に立つことを学びたい（3.96／74.6%）」である。自分の興味関心や将来に関係する内容に対しては特に学習意欲が高まることがうかがえ、個々の生徒が自らテーマを設定して探求を行う学習活動の重要性を示唆している。

● モラトリアム／ネガティブな自己イメージ

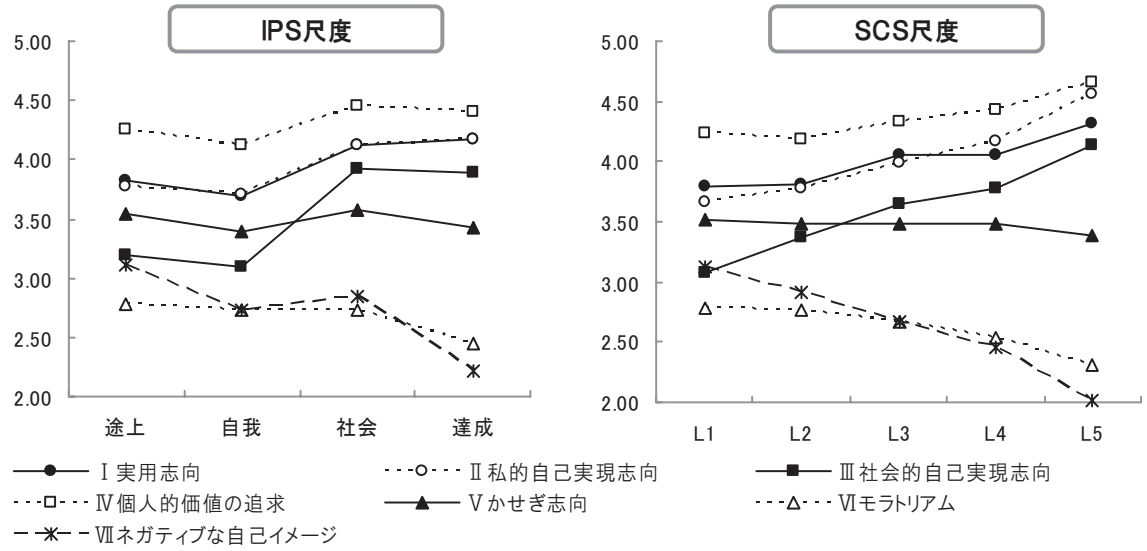
Ⅵモラトリアムや**Ⅶネガティブな自己イメージ**など、教師調査では「望ましくない」と目された価値観については、「自分にはあてはまらない」とする生徒の方がほとんどの項目で多い（平均値が3.00を切っている）。特に「今の世の中、定職につかなくても暮らしていける」は否定する生徒が多い。しかし、「先のことを考えるより、今を楽しく生きたい」「自分が世の中や他者の役に立てるイメージがもてない」については、肯定が否定を上回っている。

● 生徒の類型による違い

データ２－５では生徒をＩＰＳ尺度（アイデンティティの確立度）とＳＣＳ尺度（将来

データ2－5　高校生のキャリア形成に関する価値観（高2：類型別）

	2年全体	性別		IPS尺度					SCS尺度					
		男	女	途上	自我	社会	達成	達成／途上	L1	L2	L3	L4	L5	L5／L1
Ⅰ実用志向	3.96	3.89	4.06	3.82	3.69	4.12	4.16	1.09	3.79	3.81	4.06	4.06	4.32	1.14
Ⅱ私的自己実現志向	3.96	3.89	4.07	3.77	3.72	4.12	4.18	1.11	3.66	3.77	3.99	4.17	4.57	1.25
Ⅲ社会的自己実現志向	3.55	3.47	3.66	3.20	3.09	3.92	3.88	1.22	3.07	3.37	3.65	3.77	4.13	1.35
Ⅳ個人的価値の追求	4.31	4.28	4.36	4.25	4.13	4.45	4.41	1.04	4.23	4.19	4.34	4.42	4.66	1.10
Ⅴかせぎ志向	3.48	3.52	3.42	3.54	3.39	3.58	3.43	0.97	3.52	3.48	3.49	3.49	3.38	0.96
Ⅵモラトリアム	2.66	2.69	2.62	2.77	2.73	2.73	2.45	0.88	2.78	2.76	2.68	2.54	2.31	0.83
Ⅶネガティブな自己イメージ	2.71	2.72	2.70	3.12	2.73	2.85	2.22	0.71	3.12	2.91	2.67	2.45	2.01	0.65



ベネッセ教育総研「高校生の学習行動検証に関わる共同研究」（2004年11月）高2 n=2,950
Ⅰ～Ⅶの各カテゴリの具体的項目はデータ2－4参照。数値は5件法の平均値（5=とてもあてはまる、1=全くあてはまらない、3.00が基準）

展望に関する自己概念の肯定度）によって場合分けし（尺度はともにｐ16 を参照）、生徒の類型による違いを確認している。これら２つの尺度に共通して、類型間の数値の違いが大きいカテゴリは**Ⅲ社会的自己実現志向**と**Ⅶネガティブな自己イメージ**である。

Ⅲ社会的自己実現志向はＩＰＳ尺度の社会型・達成型（社会性の確立度が高いグループ）や、ＳＣＳ尺度のＬ３以上の類型（自己理解に基づく将来展望を描きやすいグループ）で、3.50 を越える高い数値を示している。「今」と「自分」にしか目が向かない状態（社会性が未確立、将来展望が描けない）にあっては、生徒の社会的自己実現志向は高まらないと言える。すなわち、「他者・社会・世界」などの空間的な視野の広がりと、「将来」に向かっての時間的な思考の広がりを高める指導の重要性を示唆している。

一方、**Ⅶネガティブな自己イメージ**についてＩＰＳ尺度別では、途上型の生徒のスコアが 3.12 と相対的に高い。また達成型の生徒の数値は 2.22 であり、他の３類型に比べて数値が大幅に低い。さらに、中間類型の社会型と自我型の間で数値の格差が小さいことから、自分自身への自信や期待感（自己効力）が高まるには、社会性・自我の双方の確立が必要であることがわかる。また、ＳＣＳ尺度別による格差も大きいことから、自己理解を深め目標を持つことと、このカテゴリとの結びつきが深いことも確認できる。

上記２つのカテゴリとは対照的に**Ⅴかせぎ志向**は、この２つの尺度においては類型間の数値の格差が小さい。つまり、アイデンティティの確立度や将来展望に関する自己概念の肯定度を問わず、それぞれの類型の生徒がほぼ同じ強さで持つ価値観だと言える。この点で、教師調査における「望ましさ」の数値が、「どちらとも言えない」に近い数値であったことにも対応している。

4. 今後の高等学校の進路指導

ふたたび高校教師調査の結果から報告する。**データ２－６**は、高等学校での進路指導において、今後より一層重要性が増すと思われる内容について選択していただいたものである。学校類型（章末参照）別に表示し、かつ 1997 年調査の数値も併記している。

● 1997 年同様に高い重要性：「自己理解」「生き方設計」に関する指導

選択肢として設定した７つの項目のうち、最も選択率（今後さらに重要性が増すと思う：３つ選択）が高いのは「１．進路適性など生徒の自己理解を深めるための指導」、次いで「２．将来の生活設計や進路計画の立案など生き方設計の指導」である。学校類型間での違いがあまり大きくないこと、1997 年からの変化もそれほど大きくないことなどが特徴である。

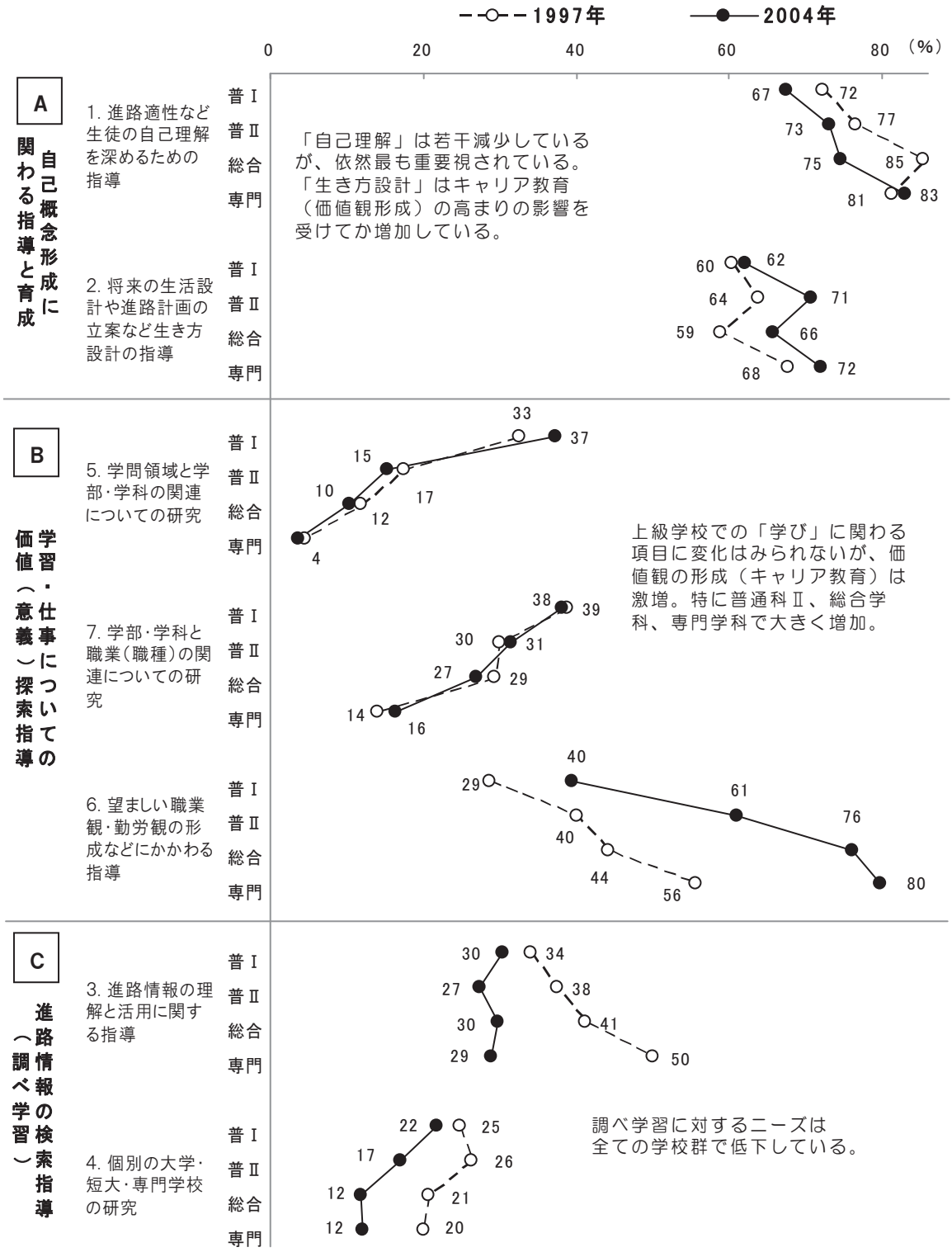
● 大幅に重要性が増加：「望ましい職業観・勤労観の形成」に関する指導

全ての学校類型で 1997 年に比べ、選択率が増加している。特に**普通Ⅱ**（+21 ポイント）、**総合**（+32 ポイント）、**専門**（+24 ポイント）での変化が大きい。

普通Ⅰでは 40%の選択率（1997 年比+11 ポイント）で、「５．学問領域と学部・学科の関連についての研究（37%）」「７．学部・学科と職業（職種）の関連についての研究（38%）」を少し上回る結果になった。

進学校の大半の生徒にとっては「職業選択」が上級学校卒業後であることが、他の学校類型に比べて**普通Ⅰ**で「職業観・勤労観育成」が相対的に重視されていない背景にある

データ2－6　今後さらに重要性が増す進路指導とその内容



数値：今後さらに重要性が増すと思う選択率（%）（重要性が増す度合いの高い選択肢3つを選択）

普Ⅰ＝普通科Ⅰ、普Ⅱ＝普通科Ⅱ、総合＝総合学科、専門＝専門学科／それぞれの学校類型については章末参照

ベネッセ教育総研「高等学校の進路指導に関する意識調査」（2004年6・7月）進路指導担当高校教師 n=1,765

と思われる。しかし進路学習の一環で、研究者や職業人との直接の交流を重視して先導的な取り組みを重ねてきた学校からは、その体験が単なる進路情報・職業情報の収集に終わらないよう配慮をして、事前に講師と確実な打合せを行うことがポイントであると、うかがうことが多い。各講師には「自分にとっての仕事のやりがい・よろこび」や「使命感」など、「生きざま」について語っていただくように依頼を行い、生徒が「望ましい自分の将来像」を具体的にイメージする契機（生き方設計）となるように考慮している、ということである。

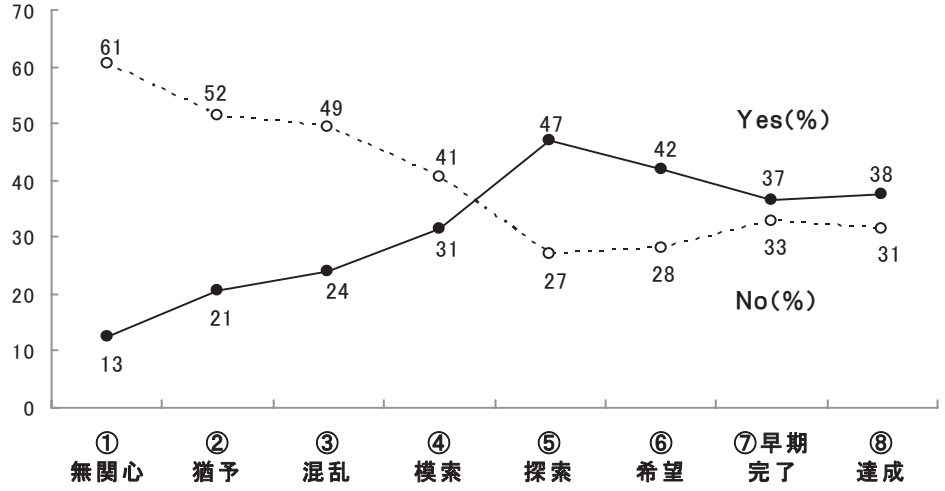
● **「進路情報の検索」に関する指導の重要性は低下**

「３.進路情報の理解と活用に関する指導」「４．個別の大学・短大・専門学校の研究」については、1997年に比べ選択率が下がっている。**データ２－１**でも確認したが、進路情報の調べ方自体は分かっている生徒が増えてきたことや、情報へのアクセスが容易になっていること、などが背景にあると考えられる。1997年には「６．望ましい職業観・勤労観の形成」と「３．進路情報の理解と活用」は、ほぼ同じ選択率であったものが、今回の調査では両者に大きな差がついた。

情報の調べ方が分かっても、自己決定を支える価値観がなければそれを活かすことはできない。高等学校の進路指導は、「情報を与え選択させマッチングの補助をする」ことから、「情報を活用しつつ自己決定を進めるために必要な価値観・考え方の形成支援」へと力点が移りつつある。

とはいえ、進路情報の調べ方が分かる生徒が全体的に増えている一方で、依然３～４割の「分からない」生徒が存在している（**データ２－１**）ことに留意したい。進路意識の発達８段階（p17を参照）によって場合分けした**データ２－７**を見ると、「自分なりの目標設定ができず悩んでいる生徒（③混乱）」や、「将来について考えることを先延ばしたり避けたりしている生徒（①無関心、②猶予）」では、「情報の調べ方そのもの」が分からないケースが半数を超えており、参照すべき情報の種類や、入手・活用法の指導が必要な状態であ

データ2－7　進路選択に必要な情報の調べ方がわかる（高2：進路意識の発達8段階別）



「高校生の進路意識と学習行動に関わる共同研究」2004年６～7月(高２）n：普通Ⅱ＝2,233、専門=1,062
①無関心～⑧達成の８段階（進路意識の発達段階）についてはp17参照。

る。教科学習指導と同様に、進路学習の指導においても、生徒の状況を的確に把握し、それに応じた内容で展開することが不可欠である。

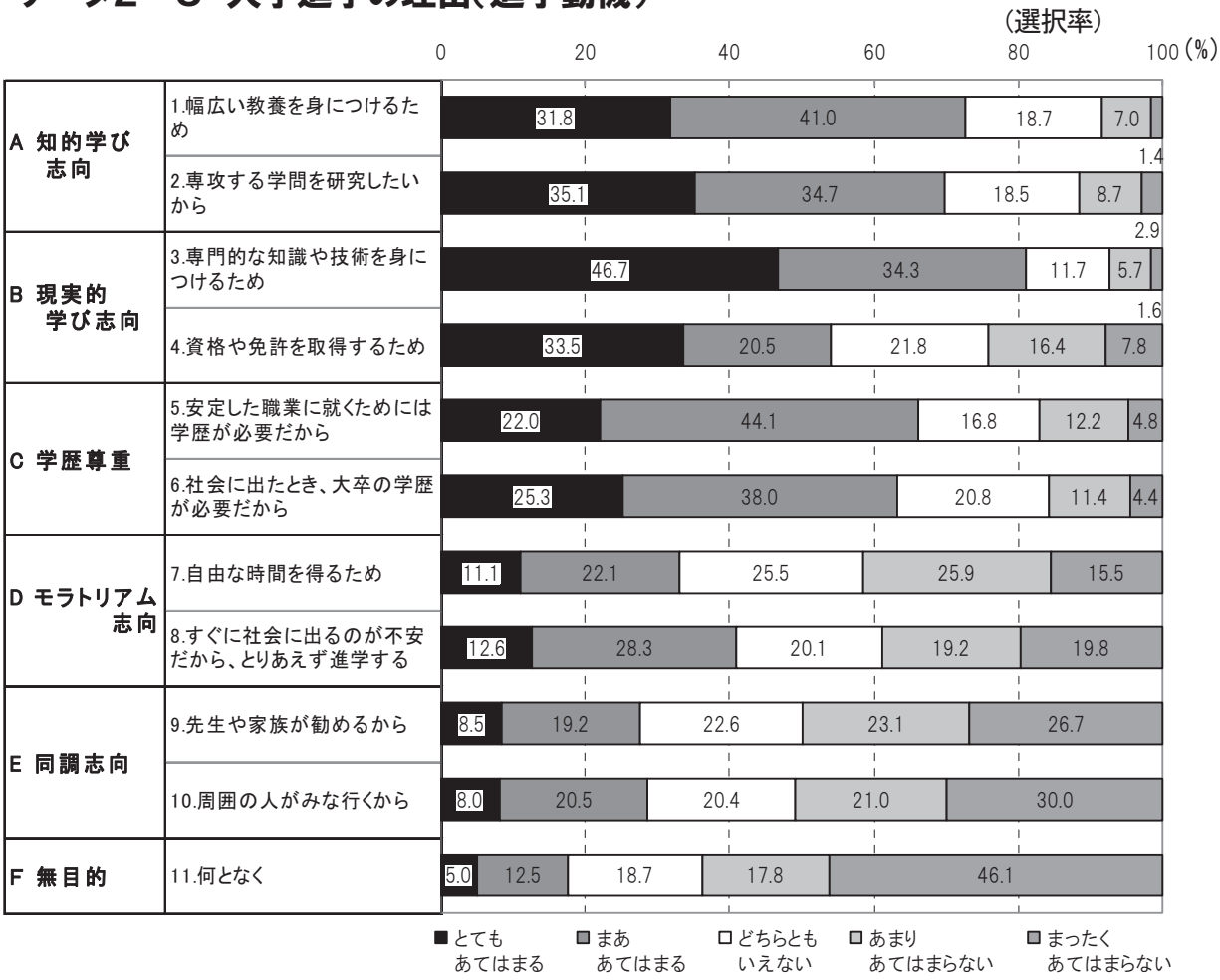
第2節
大学進学の理由（進学動機）

1．3回の大学生調査から

「なぜ大学に進学したのか」その理由として設定した 11 の項目に対する大学生の回答を**データ２－８**にまとめた。最も多くにあてはまった理由が「３．専門的な知識や技術を身につけるため（81%）（**Ｂ現実的学び志向**）」であり、次いで「１．幅広い教養を身につけるため（73%）」「２．専攻する学問を研究したいから（70%）」（ともに**Ａ知的学び志向**）などの入学後の学習につながる動機である。一方、「７．自由な時間を得るため（33%）」「10. 周囲の人がみな行くから（29%）」など、**Ｄモラトリアム志向**や**Ｅ同調志向**で入学してきた学生の割合はその半分以下程度である。

３つの調査の過回での変化を単純に比較するために、肯定指数で表したものが**データ２－９**である。３回の調査での違いについては、肯定指数の高さに関する順序の大きな入れ替えなどはない。しかし、資格志向（「４．資格や

データ2－8　大学進学の理由（進学動機）



免許を取得するため」）の経年での増加や学歴尊重（「５．安定した職業に就くためには学歴が必要」）の減少などが確認できる。

● 学部系統別の傾向

６つの志向性の学部系統別による違いを順次確認していきたい（学部系統の分類についてはｐ14・15参照）。

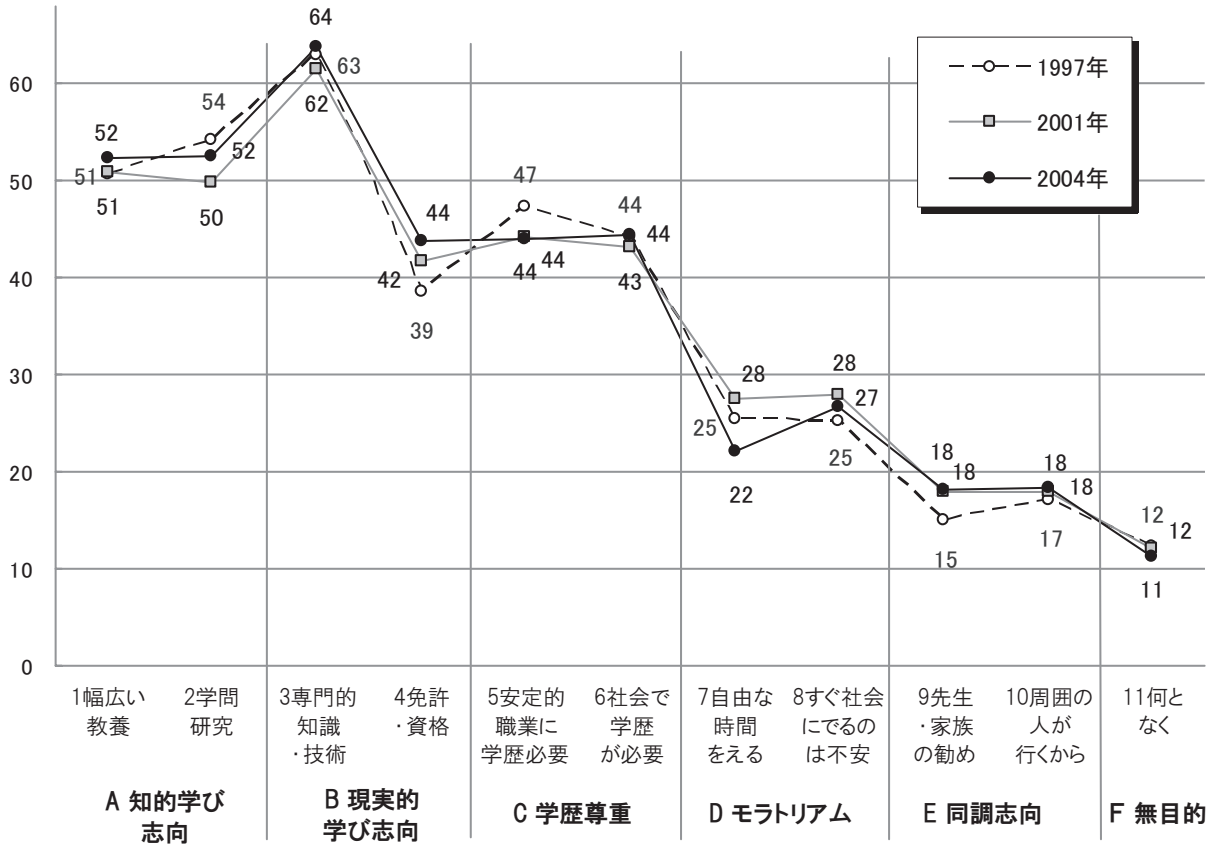
データ２－10には、**Ａ知的学び志向**と**Ｂ現実的学び志向**について３回の調査の肯定指数を表示した。これを見ると、**④医歯薬系統**で**Ｂ現実的学び志向**の数値が目立って高い。就業にほぼ直結可能な国家資格の取得を目指す学生が大半であることから当然のことかもしれないが、他の学部系統と明確に異なる点である。また、**Ｂ現実的学び志向**の経年での伸びが大きいのは**③総合系統**である。

５つの学部系統の中では、**②法経系統**で**Ａ知的学び志向・Ｂ現実的学び志向**両方の数値が最も低く、ここにあげたような大学入学後の学習に結びつきやすい動機で入学してくる学生の比率が、他の系統に比べて少ないことが確認できる。

他方、**データ２－11**に見るように、**Ｃ学歴尊重**の傾向が最も高いのも**②法経系統**である。**Ｃ学歴尊重**の傾向は**③総合系統**や**①人社外系統**で低い。

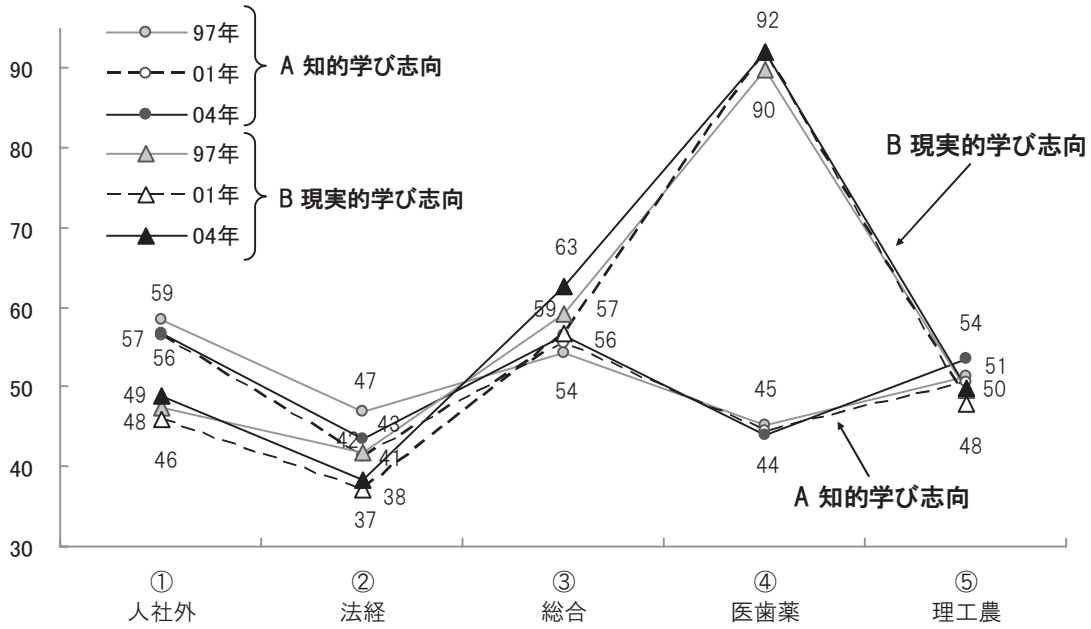
また、**Ｄモラトリアム志向・Ｅ同調志向・Ｆ無目的**の３つについては、スコアの違いはあるが学部系統別の傾向は類似しており、**④医歯薬系統**で最も低く、**②法経系統**でやや高い。

データ2－9 大学進学動機 3回調査比較



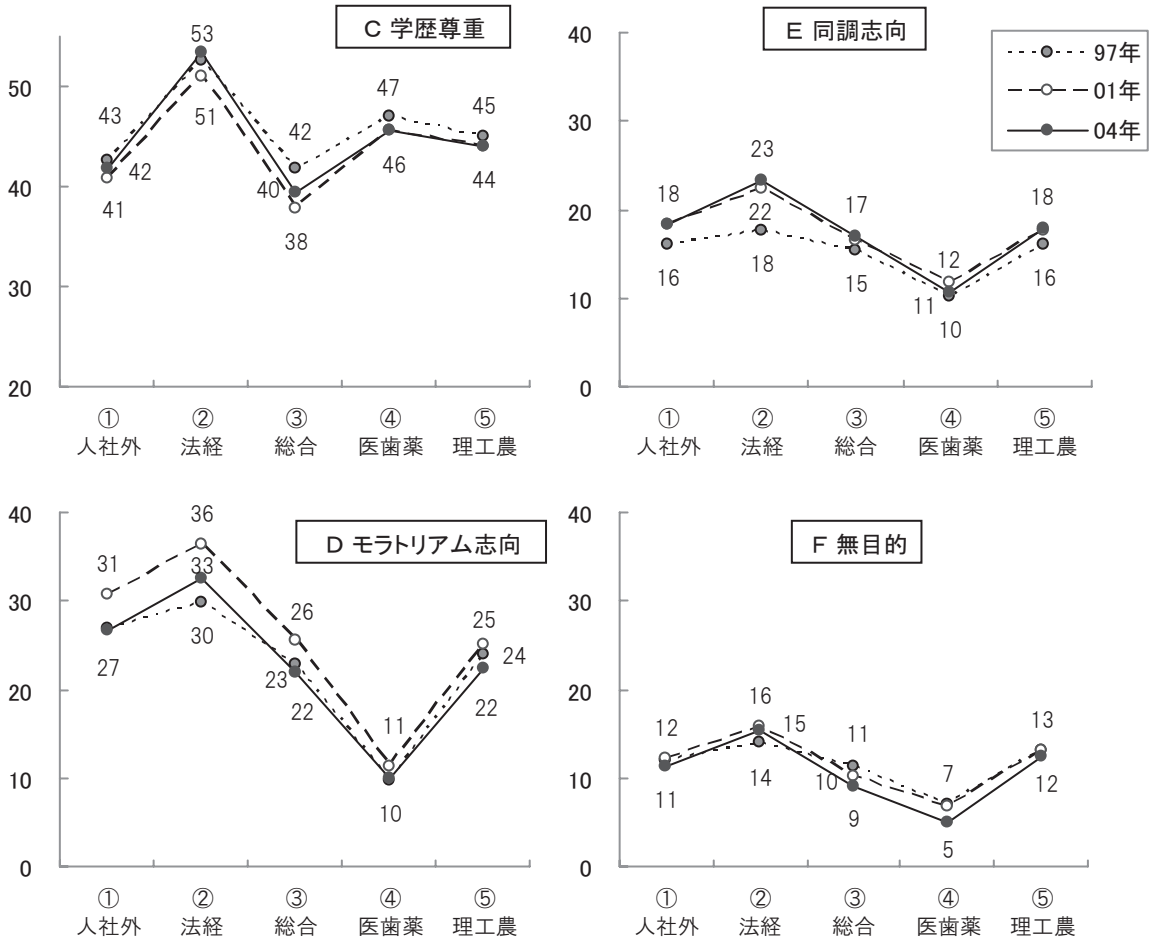
〔注〕数値は肯定指数＝とてもあてはまる（%）＋まあてはまる（%）×0.5

データ2－10　大学進学動機　3回調査比較－学部系統別（1）



〔注〕数値は肯定指数＝とてもあてはまる（%）＋まああてはまる（%）×0.5

データ2－11　大学進学動機　3回調査比較－学部系統別（2）



〔注〕数値は肯定指数＝とてもあてはまる（%）＋まああてはまる（%）×0.5

データ２－12にはデータ２－10･11の内容に加え、ＩＰＳ尺度による類型別の数値も掲載した。類型別に３回の調査の傾向を大まかに把握するために、大学での学習行動に結びつきやすい進学動機であるＡ知的学び志向とＢ現実的学び志向をⅠ進学≒知的投資行動（学び志向）として括って合計値を求めた。一方で、大学での学習とは強い結びつきがないＤモラトリアム志向とE同調志向、F無目的を括ってⅢ進学≒消費行動（非学び志向）とした。C学歴尊重はⅡ進学≒経済的投資行動（功利主義志向）として独立させた。

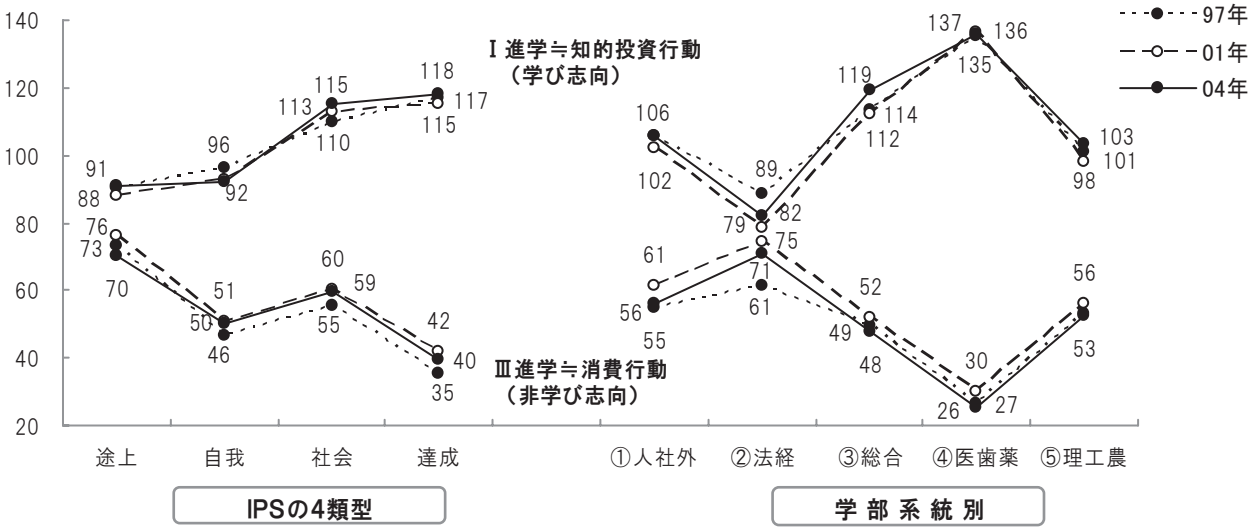
データ2－12 大学進学動機の6パターン別の変動（3回調査比較）

カテゴリ	年次	IPS尺度別 全体	途上	自我	社会	達成	分析のコメント	学部系統別 ①人社外	②法経	③総合	④医歯薬	⑤理工農
A 知的学び志向	97年	52.5	44.8	48.8	55.2	61.0	アイデンティティが確立した達成型の反応が強い。	58.5	47.0	54.3	45.2	51.3
	01年	50.4	42.0	45.6	54.4	59.0		56.4	41.4	55.5	44.5	50.5
	04年	52.4	43.2	45.9	55.9	59.8		56.7	43.4	56.5	44.0	53.6
	04年／01年	1.04	1.03	1.01	1.03	1.01		1.01	1.05	1.02	0.99	1.06
B 現実的学び志向	97年	50.9	45.8	47.4	54.6	55.9	社会型の反応が強い。全体としてやや増えているが、自我型には変化がない。	47.5	41.8	59.3	89.8	49.6
	01年	51.6	45.7	46.8	58.2	56.3		45.9	37.1	56.8	92.0	47.8
	04年	53.8	47.8	46.3	59.5	58.2		48.8	38.4	62.6	92.0	49.8
	04年／01年	1.04	1.05	0.99	1.02	1.03		1.06	1.04	1.10	1.00	1.04
Ⅰ進学≒知的投資行動（学び志向）（A＋B）	97年	103.4	90.6	96.2	109.8	117.0	社会･達成型は過去最大となったが自我型は変化がなく、「学び」の価値がわかりにくい。	106.0	88.8	113.6	135.0	100.9
	01年	102.0	87.7	92.4	112.6	115.4		102.3	78.5	112.3	136.5	98.3
	04年	106.2	91.0	92.2	115.4	118.0		105.5	81.8	119.1	136.0	103.4
	04年／01年	1.04	1.04	1.00	1.03	1.02		1.03	1.04	1.06	1.00	1.05
C 学歴尊重（功利主義志向）Ⅱ進学≒経済的投資行動	97年	45.8	47.9	40.7	51.6	44.2	社会型の反応が強く、自我型は低い。全体として変化せず、一定数は存在する。	42.6	52.6	41.9	47.0	45.0
	01年	43.7	44.6	38.7	48.2	43.0		40.7	51.0	37.7	45.7	44.1
	04年	44.2	44.7	38.2	48.9	43.8		41.8	53.4	39.5	45.7	44.1
	04年／01年	1.01	1.00	0.99	1.02	1.02		1.03	1.05	1.05	1.00	1.00
Ⅲ進学≒消費行動（非学び志向）（D＋E＋F）	97年	52.4	73.5	46.4	55.5	35.4		54.9	61.3	49.4	26.7	53.1
	01年	57.9	76.4	50.9	60.4	41.9		61.1	74.5	52.2	29.8	55.9
	04年	53.8	70.1	50.1	59.3	39.7		56.3	71.0	47.9	25.6	52.6
	04年／01年	0.93	0.92	0.98	0.98	0.95		0.92	0.95	0.92	0.86	0.94
D モラトリアム志向	97年	25.4	32.7	23.6	26.4	19.2	途上型の反応が強く、達成型は低い。自我･社会は中間型。	26.9	29.8	22.8	9.7	23.9
	01年	27.8	34.5	26.5	27.8	21.7		30.8	36.3	25.6	11.3	25.1
	04年	24.4	29.8	24.2	26.1	19.2		26.6	32.5	21.9	9.9	22.4
	04年／01年	0.88	0.87	0.91	0.94	0.88		0.86	0.90	0.86	0.88	0.89
E 同調志向	97年	14.8	20.9	11.9	16.7	9.9	自我（その人らしさ）の確立度が低い途上･社会型の反応が強い。自我が確立しないと主体的行動はとれない。	16.0	17.6	15.4	10.1	16.0
	01年	18.0	22.9	13.3	21.0	13.8		18.2	22.3	16.5	11.8	17.6
	04年	18.2	22.6	14.7	21.8	14.1		18.4	23.2	16.9	10.7	17.8
	04年／01年	1.01	0.99	1.10	1.04	1.02		1.01	1.04	1.02	0.91	1.01
F 無目的	97年	12.3	19.8	10.9	12.4	6.2	アイデンティティが確立していない途上型の反応は20ポイント弱のレベルにある。	12.0	13.9	11.2	6.9	13.2
	01年	12.2	19.1	11.1	11.5	6.4		12.1	15.9	10.1	6.7	13.2
	04年	11.2	17.6	11.2	11.3	6.4		11.3	15.3	9.1	5.0	12.4
	04年／01年	0.92	0.92	1.01	0.99	1.00		0.93	0.96	0.90	0.75	0.94
A～Fの計	97年	201.6	212.0	183.4	216.8	196.7	自我型の肯定度がやや低く、社会型がやや高い。経年的には安定している。	203.5	202.7	204.9	208.7	199.0
	01年	203.6	208.7	182.0	221.1	200.2		204.1	204.0	202.2	212.0	198.3
	04年	204.2	205.7	180.5	223.7	201.5		203.6	206.2	206.5	207.3	200.1

〔注1〕□は全体より＋10%以上の格差がついたボックス、○は全体より-10%以下の格差がついたボックス

さらにデータ２－12 中のⅠ進学≒知的投資行動（学び志向）とⅢ進学≒消費行動（非学び志向）をグラフ化したのがデータ２－13 である。これを見ると、Ⅰ進学≒知的投資行動（学び志向）は④医歯薬系統で数値が最も高い。③総合系統がそれに続き、なおかつ 2004 年調査で数値が伸びている。また、②法経系統においては 1997 年に比べ、Ⅰ進学≒知的投資行動（学び志向）の数値低下とⅢ進学≒消費行動（非学び志向）の増加が目立つが、データ２－14 で確認できるとおり、その傾向は法学系統学部よりも経済系統学部で顕著である。法学系統学部では、この期間に法科大学院の創設などがあったものの３回の調査においてＢ現実的学び志向の数値に関して大きな変動は見られていない。

データ2－13　大学進学動機の6パターン別の変動（3回調査比較）グラフ



データ2－14　大学進学動機の6パターン別の変動 － 法・経済系統

	年次	法経	法学	経済	（法ー経）	全体
A知的学び志向	97年	47.0	48.9	45.7	3.2	52.5
	01年	41.4	47.0	37.7	9.3	50.4
	04年	43.4	48.3	39.5	8.8	52.4
B現実的学び志向	97年	41.8	43.9	40.3	3.6	50.9
	01年	37.1	41.4	34.2	7.2	51.6
	04年	38.4	42.6	35.1	7.5	53.8
Ⅰ進学≒知的投資行動（学び志向）（A＋B）	97年	88.8	92.8	86.0	6.8	103.4
	01年	78.5	88.4	71.9	16.5	102.0
	04年	81.8	90.9	74.6	16.3	106.2
C学歴尊重（功利主義志向）Ⅱ進学≒経済的投資行動	97年	52.6	52.8	52.4	0.4	45.8
	01年	51.0	50.2	51.5	−1.3	43.7
	04年	53.4	51.9	54.6	−2.7	44.2
Ⅲ進学≒消費行動（非学び志向）（D＋E＋F）	97年	61.3	56.7	64.5	−7.8	53.6
	01年	74.5	63.9	81.7	−17.8	58.0
	04年	71.0	61.8	78.1	−16.3	53.8
2004／1997　Ⅰ進学≒知的投資行動（学び）		0.92	0.98	0.87		1.03
2004／1997　Ⅱ進学≒経済的投資行動		1.02	0.98	1.04		0.97
2004／1997　Ⅲ進学≒消費行動（非学び）		1.16	1.09	1.21		1.00

〔注1〕2004／1997=2004年の値を1997年の値で割った指数。
〔注2〕全体 n=14,582、法学 n=1,210、経済 n=1,516（2004年）

●ＩＰＳ尺度（アイデンティティの確立度）別の傾向

Ⅰ進学≒知的投資行動（学び志向）に関するＩＰＳの４類型別の数値（**データ２－12・13**）を見ると、社会性の確立度による数値の差が大きいことが確認できる。つまり、社会性の確立度が高い社会型や達成型の数値が高く、社会性の発達度が平均以下の集団である途上型・自我型の数値が低い。1997 年からの変化を見ると、社会型の数値が増加している一方で、自我型の数値が低下しており、社会性の確立度に依拠する度合いが大きくなっていると考えられる。

また、**Ⅲ進学≒消費行動（非学び志向）**については、自我が確立していない類型（途上型・社会型）で高い数値を示している。しかし、中間類型である自我型と社会型の違いがそれほど大きくないことから、社会性の確立度も影響を与えていることがわかる。

2. 高校生と大学生の比較(1)
－入試難易度別／学部系統別の比較

データ２－15 では、６つの進学動機のパターンについて、高校生（2002 年・高２）と大学生（2004 年）の結果を比較している（表は**データ２－16**）。入試難易度（高校生は本人の学力到達度／大学生は学部の入試難易度：ｐ15 参照）と学部系統（高校生は志望する学部系統／大学生は在籍学部）の類型による違いを示した。高校生は「あなたが大学（上級学校）へ進学する理由としてどの程度あてはまるか」、大学生は「あなたが大学へ進学した理由としてどの程度あてはまるか」をそれぞれ回答してもらった。各志向ごとに傾向を確認していきたい。

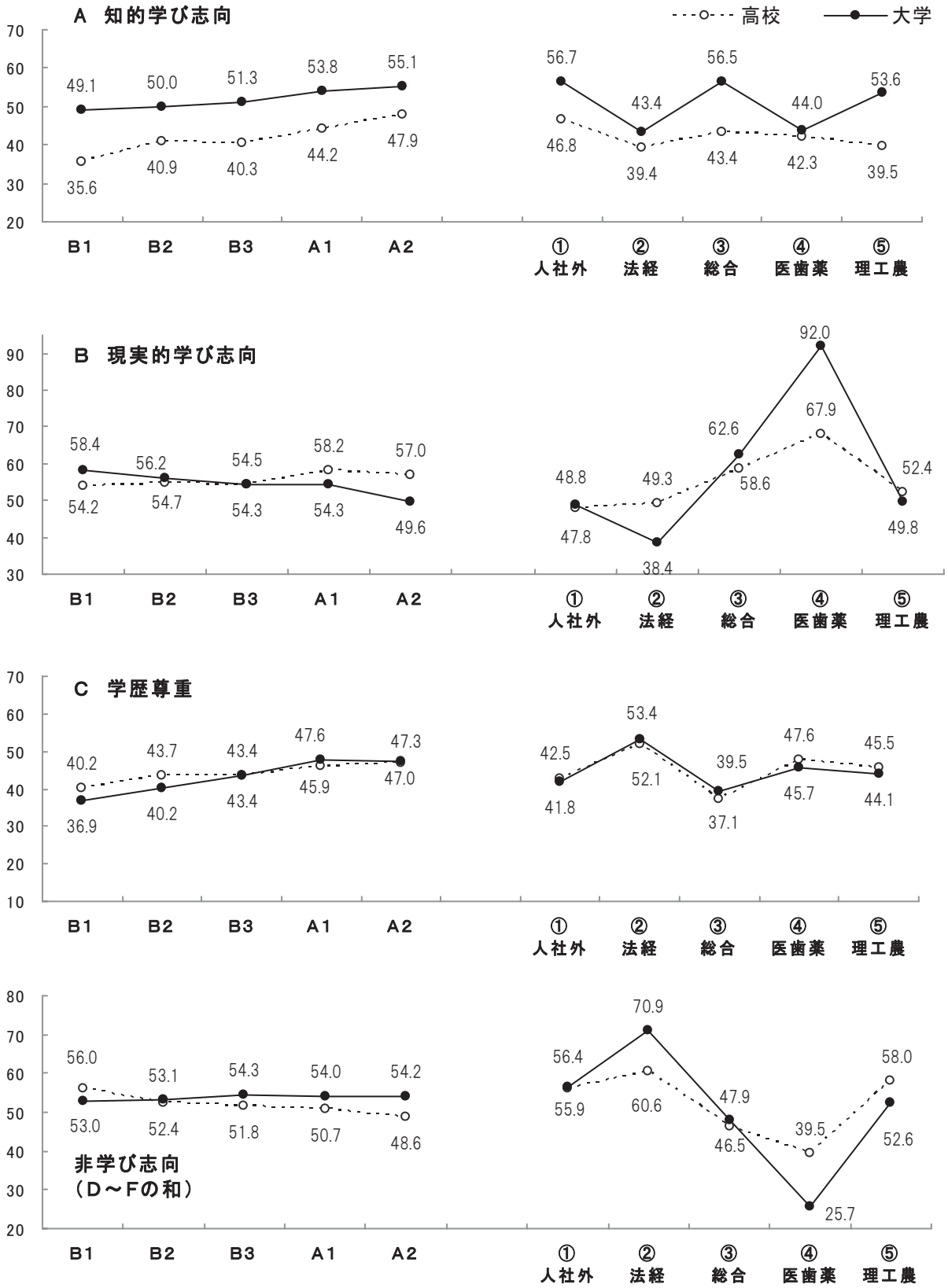
●　知的学び志向

Ａ知的学び志向は、高校生に比べて大学生の数値が高いことが特徴である（高校生 41.8／大学生 52.4：肯定指数、以下同様）。2002 年度の高校２年生は、大学調査を実施した 2004 年度には高卒後１年目であり、今回の大学生調査の集計対象（大学２～４年生）には含まれない。しかし 1997 年の調査においても同様のことが言えるので、この志向について高校生の評価水準と大学生の評価水準には差がある（大学生の方が高い）と考えてよいだろう。つまり、大学入学後に振り返って自己評価した時に高校時代とのズレが生じているということである。言い換えると、大学生が「学問研究」や「教養教育」を入学後に実際に体験してみると、高校時代に想像していた以上の大きな意義を発見できたということではないだろうか（期待以上の満足）。

高校生の学力到達度別に見ると、最も低い学力層のＢ１では 35.6 ポイントである。学力到達度が上がると肯定指数も少しずつ高くなり、最も高い学力層のＡ２では 47.9 ポイントになる。大学生においても、入試難易度の高い学部の在籍者ほど肯定度が高まる傾向が見られるが、その傾向差は高校生ほどには大きくならない（前述の類型区分方法の違いによる影響とも考えられる）。また、全ての学力層において大学生の数値が高校生を上回っているが、両者の格差が最大なのはＢ１である。学力到達度の低いグループの方が、高校時代に考えていた以上に大学での「学び」に触発されて考え方が変わる度合いが大きいのかもしれない。

学部系統別では特に、①人社外、③総合、⑤理工農で大学生の数値が高校生の数値を上回る傾向が強く見られる。反対に、大学入学後の数値が高校時代とあまり変わらない（低い）のは②法経と④医歯薬である。

データ2－15　大学進学動機の6パターン ／ 高大対比



〔注1〕高校生の値は、ベネッセ教育総研「高校生の自己概念と学習行動調査」（2002年10月 n＝8,368 高2対象）により作表。
〔注2〕数値は肯定指数＝とてもあてはまる（％）＋まああてはまる（％）×0.5。 データ2－16を参照。

● 現実的学び志向

専門的な知識・技術や、免許・資格の取得などの**B現実的学び志向**は、高校生も大学生も全体集計値には、ほとんど違いがない（高校生54.8／大学生53.8）。

高校生・大学生とも、入試難易度（学力到達度）別には大きな傾向差が発生しない。ただし、高校生は学力到達度が高くなると数値も若干高くなる（学力と正の関係）のだが、大学生はその逆である。

学部系統別に見ると、特に**④医歯薬系統**で高校生と比べた際の大学生の数値の高さが目立っている（高校生67.9／大学生92.0）。

反対に、高校生より大学生の数値の方が低いのが**②法経系統**である。専門的な知識・技能やそれを証明する資格の取得は、大学に入ってみると高校時代に（漠然と）考えていたよりも困難で身近な目標になりにくく、そこには自分が大学に進学した意義を見出しにくくなるのかもしれない。

● 学歴尊重

C学歴尊重は、高校生と大学生で全体の数値も入試難易度（学力到達度）別・学部系統別の数値もほぼ一致している。

入試難易度（学力到達度）の高い層のほうが、やや数値が高い傾向にある。また、学部系統別では、**②法経系統**で高い。

データ2－16 大学進学動機／ 高大対比－入試難易度・学部系統別

	学校種別	全体	入試難易度別					学部系統別					参考97年全体
			B1	B2	B3	A1	A2	①人社外	②法経	③総合	④医歯薬	⑤理工農	
A 知的学び志向	高校	41.8	35.6	40.9	40.3	44.2	47.9	46.8	39.4	43.4	42.3	39.5	41.0
	大学	52.4	49.1	50.0	51.3	53.8	55.1	56.7	43.4	56.5	44.0	53.6	52.5
	増減率	1.25	1.38	1.22	1.27	1.22	1.15	1.21	1.10	1.30	1.04	1.35	1.28
B 現実的学び志向	高校	54.8	54.2	54.7	54.5	58.2	57.0	47.8	49.3	58.6	67.9	52.4	56.5
	大学	53.8	58.4	56.2	54.3	54.3	49.6	48.8	38.4	62.6	92.0	49.8	50.9
	増減率	0.98	1.08	1.03	1.00	0.93	0.87	1.02	0.78	1.07	1.35	0.95	0.90
C 学歴尊重	高校	43.8	40.2	43.7	43.4	45.9	47.0	42.5	52.1	37.1	47.6	45.5	40.0
	大学	44.2	36.9	40.2	43.4	47.6	47.3	41.8	53.4	39.5	45.7	44.1	45.8
	増減率	1.01	0.92	0.92	1.00	1.04	1.01	0.98	1.02	1.07	0.96	0.97	1.15
非学び志向（D～Fの和）	高校	52.4	56.0	52.4	51.8	50.7	48.6	55.9	60.6	46.5	39.5	58.0	49.5
	大学	53.8	53.0	53.1	54.3	54.0	54.2	56.4	70.9	47.9	25.7	52.6	53.6
	増減率	1.03	0.95	1.01	1.05	1.06	1.11	1.01	1.17	1.03	0.65	0.91	1.08
D モラトリアム志向	高校	23.5	26.3	24.0	23.4	23.2	21.1	27.2	26.9	21.8	17.6	24.4	20.6
	大学	24.4	25.6	25.8	24.6	24.4	22.8	26.6	32.5	21.9	9.9	22.4	25.3
	増減率	1.04	0.98	1.07	1.05	1.05	1.08	0.98	1.21	1.00	0.56	0.92	1.23
E 同調志向	高校	14.7	15.4	14.5	14.8	15.0	13.8	14.6	17.4	13.2	12.3	15.5	13.4
	大学	18.2	15.9	16.8	18.9	18.8	18.7	18.4	23.2	16.9	10.7	17.8	16.0
	増減率	1.24	1.04	1.16	1.28	1.26	1.36	1.26	1.33	1.28	0.87	1.15	1.19
F 無目的	高校	14.1	14.3	13.9	13.6	12.6	13.7	14.0	16.3	11.5	9.5	18.1	15.5
	大学	11.2	11.4	10.5	10.7	10.8	12.6	11.3	15.3	9.1	5.0	12.4	12.3
	増減率	0.79	0.80	0.76	0.79	0.86	0.92	0.81	0.93	0.79	0.53	0.68	0.80

〔注1〕高校生の値は、ベネッセ教育総研「高校生の自己概念と学習行動調査」（2002年10月実施 n＝8,368 高2対象）により作表。
〔注2〕数値は肯定指数＝とてもあてはまる（%）＋まああてはまる（%）×0.5
〔注3〕□は全体より＋10%以上の格差がついたボックス、○は全体より-10%以下の格差がついたボックス

● 非学び志向

Ｄモラトリアム志向、Ｅ同調志向、Ｆ無目的を合計した**非学び志向**の数値も、全体では高校生と大学生に大きな違いはない（高校生52.4／大学生53.8）。

入試難易度（学力到達度）別に見ると、高校生では学力到達度の高い層ほど数値が低い傾向があるのに対し、大学生の数値ではほとんど差が見られない。学部系統別では、**②法経系統**で大学生の数値が高校生に比べて高いのが目立つ。一方、**④医歯薬系統**や**⑤理工農系統**では対照的に大学生の数値の方が低い。

3. 高校生と大学生の比較（2）ー進路意識の発達8段階による違い

データ２－17では、６つの志向性について高校生と大学生の数値を「進路意識の発達８段階（ｐ17 参照）」別に整理した（グラフは**データ２－18**）。**Ａ知的学び志向**以外の各志向では、進路意識の発達８段階ごとに高校生と大学生でほぼ一致した数値を示している。

Ａ知的学び志向は、先に確認してきたように、高校生より大学生の数値が高く出てくるのが特徴である。発達段階別では、特に「４

データ2－17　大学進学動機／ 高大対比－進路意識の発達8段階別

	学校種別	全体	進路意識の発達段階別 1 無関心	2 猶予	3 混乱	4 模索	5 探索	6 希望	7早期完了	8 達成
A 知的学び志向	高校	41.8	21.9	23.4	36.1	36.6	45.7	51.6	46.1	45.2
	大学	52.4	34.5	45.7	47.1	51.7	53.0	58.1	51.6	52.6
	増減率	1.25	1.57	1.95	1.30	1.41	1.16	1.13	1.12	1.16
B 現実的学び志向	高校	54.8	34.4	35.5	50.4	47.8	62.1	63.9	61.5	57.9
	大学	53.8	34.4	42.0	46.0	47.4	60.3	61.3	62.1	56.2
	増減率	0.98	1.00	1.18	0.91	0.99	0.97	0.96	1.01	0.97
C 学歴尊重	高校	43.8	47.6	43.6	45.8	41.8	33.7	43.5	43.0	46.7
	大学	44.2	48.1	45.1	45.3	43.8	38.9	42.5	47.5	46.4
	増減率	1.01	1.01	1.03	0.99	1.05	1.15	0.98	1.11	0.99
非学び志向（D～Fの和）	高校	52.4	104.0	85.8	64.0	64.0	34.4	34.1	38.7	44.5
	大学	53.8	115.0	83.6	69.6	60.6	36.9	38.5	44.9	51.7
	増減率	1.03	1.11	0.97	1.09	0.95	1.07	1.13	1.16	1.16
D モラトリアム志向	高校	23.5	32.2	29.6	27.4	26.7	19.5	18.6	18.8	22.2
	大学	24.4	38.0	36.2	30.2	28.2	18.2	18.6	19.4	23.6
	増減率	1.04	1.18	1.22	1.10	1.06	0.94	1.00	1.03	1.06
E 同調志向	高校	14.7	28.8	23.7	18.4	16.8	6.7	9.5	11.1	14.6
	大学	18.2	33.6	25.6	23.2	19.2	11.4	13.8	16.1	18.7
	増減率	1.24	1.17	1.08	1.26	1.15	1.71	1.45	1.44	1.28
F 無目的	高校	14.1	43.0	32.5	18.2	20.4	8.2	6.0	8.8	7.7
	大学	11.2	43.4	21.8	16.3	13.1	7.3	6.1	9.4	9.5
	増減率	0.79	1.01	0.67	0.89	0.64	0.88	1.02	1.07	1.23

〔注1〕高校生の値は、ベネッセ教育総研「高校生の自己概念と学習行動調査」（2002年10月実施 n＝8,368 高2対象）により作表。

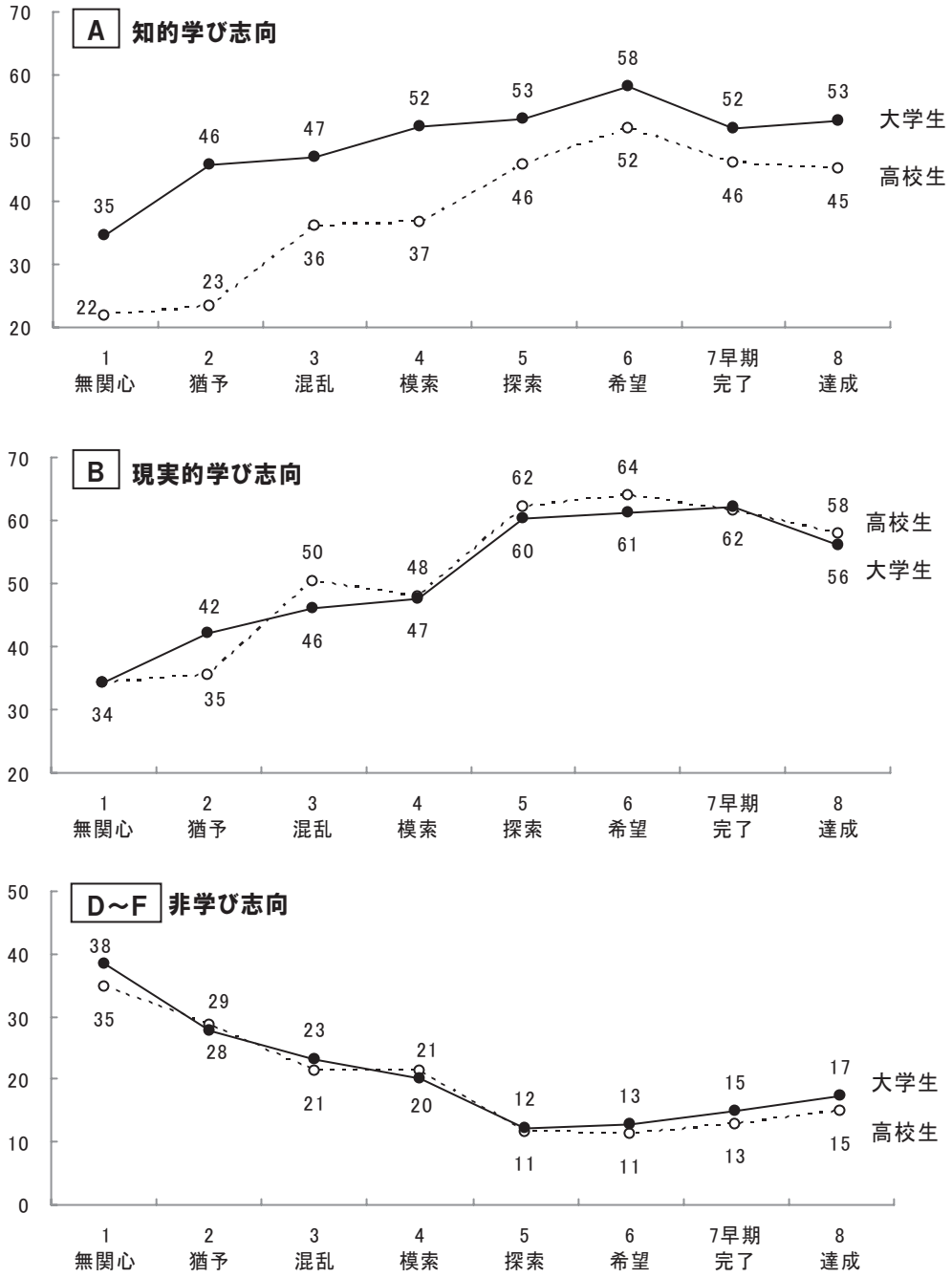
〔注2〕進路意識の発達段階についてはp17参照。

〔注3〕数値は肯定指数＝とてもあてはまる（％）＋まああてはまる（％）×0.5

〔注4〕□は全体より＋10％以上の格差がついたボックス、○は全体より-10％以下の格差がついたボックス

模索」レベル以下で大学生と高校生の格差が大きい。高校生では、目標が定まらないと大学での学びにも動機づけられない状況なのだが、大学生では目標はまだ探している途中であっても教養教育や専門学問の意義を見出せるようになっているのではないかと解釈している。「目標のない学びは成立しにくい」のだが、一方で「学びによる世界の広がり」が目標との出会いを促すことを期待させられる。

データ2－18 大学進学動機／ 高大対比－進路意識の発達8段階別



〔注〕数値はデータ2－17と同じ

4. 大学進学動機と入学後の満足度の関係

データ２－19 では、11 の進学動機の各志向性に「とてもあてはまる」と回答した学生のみを抽出して、大学教育に対する各評価項目への満足度を集計した。どのような動機で入ってきた学生が、大学教育のどの点にどの程度満足しているのかを示している。

「Ⅰ大学全般満足度」「Ⅱ授業満足度」「Ⅲ観点別満足度」「Ⅳ人間的成長／自己効力」のほとんど全ての項目でＡ知的学び志向で入学してきた学生達の満足度が最も高く、Ｆ無目的で入学してきた学生達の満足度が最低である。

例外が２項目ある。１つは、「11. 資格取得に役立つ科目」だが、これは「資格・免許取得（Ｂ現実的学び志向）」を動機に入学してきている学生からの評価が最も高い。

もう１つは「８．一般教養的な教育」に対する評価である。最高値は「幅広い教養の修得（Ａ知的学び志向）」を目指して入学してきた学生であるが、「資格・免許取得」を動機に入学してきた学生の満足度が最も低い点に着目したい。資格・免許の取得を目指して学ぶことと、視野の拡大を図る教養教育に取り組むことは相容れないものではないはずなのだが、彼・彼女らの反応は「無目的」入学者よりも低い。高校の進路指導、および大学入学直後の初期指導において留意すべき点ではないだろうか。

データ2－19 進学動機別　大学満足度
ー どのような動機で進学すれば満足度は高いのか

	全体	A知的学び		B現実的学び		C学歴尊重		Dモラトリアム		E同調		F無目的	MAX	MIN	MAX／MIN
		幅広い教養	学問を研究	専門知識・技術	資格や免許	職業に学歴	社会に学歴	自由な時間	とりあえず	先生や家族	周囲の人	何となく			
Ⅰ 大学全般満足度	44.5	54.1	54.4	50.5	47.1	44.5	44.6	46.3	41.1	40.9	40.5	32.7	－	－	1.7
1 大学全般満足度	45.7	54.0	53.3	50.2	46.6	46.7	46.3	48.5	43.2	43.1	43.4	36.1	54.0	36.1	1.5
12 学校に行くのが楽しみだ	35.4	45.8	46.4	41.9	39.4	34.1	34.8	36.3	31.6	32.1	30.5	24.4	46.4	24.4	1.9
26 この学校にきて良かった	52.3	62.6	63.3	59.2	55.3	52.7	52.6	54.2	48.3	47.5	47.7	37.4	63.3	37.4	1.7
Ⅱ 授業満足度	38.1	45.5	46.1	45.7	47.1	39.9	38.2	36.7	34.0	36.6	34.3	29.0	－	－	1.6
5 授業・教育システム	27.0	34.3	34.7	32.7	30.8	27.2	26.5	25.1	22.7	24.1	22.7	17.9	34.7	17.9	1.9
8 一般教養的な教育が充実	28.7	39.8	31.8	28.4	26.2	31.1	32.2	34.9	31.7	33.8	32.0	28.0	39.8	26.2	1.5
4 やりたい分野の勉強できる	46.8	54.3	61.9	58.5	55.7	46.2	44.3	42.1	38.1	40.3	38.6	33.8	61.9	33.8	1.8
14 専門 基礎教育がある	50.2	59.0	60.7	60.6	59.4	52.9	50.3	46.3	44.8	49.1	45.1	37.7	60.7	37.7	1.6
11 資格取得に役立つ科目	37.7	40.0	41.4	48.5	63.5	42.0	37.8	34.9	32.6	35.5	33.3	27.3	63.5	27.3	2.3
Ⅲ 観点別満足度	29.4	35.1	33.7	32.9	32.0	31.2	30.7	31.1	28.1	29.4	28.9	24.9	－	－	1.4
2 施設・設備	38.7	44.1	40.8	40.8	38.6	42.6	41.7	43.3	40.3	39.8	41.6	37.3	44.1	37.3	1.2
3 進路支援の体制	20.2	24.7	22.1	22.6	24.3	23.2	22.1	22.4	19.7	20.1	20.1	15.9	24.7	15.9	1.6
4 教員	29.4	36.7	38.3	35.2	33.0	27.9	28.4	27.6	24.3	28.3	25.1	21.5	38.3	21.5	1.8
Ⅳ 人間的成長/自己効力	37.5	46.5	45.5	44.2	43.7	39.4	38.5	37.9	33.9	36.2	34.9	28.3	－	－	1.6
4 大学・学部で、自分の人間的な成長が得られると思う	48.9	59.1	57.4	56.2	54.4	50.5	48.8	48.9	44.6	46.2	43.9	37.6	59.1	37.6	1.6
18 友達から良い刺激を受ける	45.2	54.6	54.3	51.8	50.2	46.7	46.0	46.1	41.6	43.7	42.9	33.5	54.6	33.5	1.6
17 勉強や物事をやり遂げた経験が多い	29.9	38.2	38.9	37.4	36.5	32.9	31.8	28.5	24.6	28.0	26.8	19.8	38.9	19.8	2.0
16 自分の進路や「生き方」を考える機会が多い	26.0	34.3	31.3	31.5	33.6	27.5	27.3	28.2	24.9	26.7	25.9	22.4	34.3	22.4	1.5
Ⅰ～Ⅳ 平均	37.4	45.3	44.9	43.3	42.5	38.7	38.0	38.0	34.3	35.8	34.7	28.7	－	－	1.6

数値：Ⅰ～Ⅳの各評価項目に対する評価（「とてもあてはまる%」＋「まああてはまる%×0.5」）
Ａ～Ｆの各進学動機に「とてもあてはまる」とした学生のみを集計対象にしている。
□○は全体に対して±10%以上の格差が発生したボックス。「MAX／MIN」の列のみⅠ～Ⅳの平均に対して±10%以上の格差が発生したボックス。

第3節 大学・学部決定に影響を与える媒体（メディア）

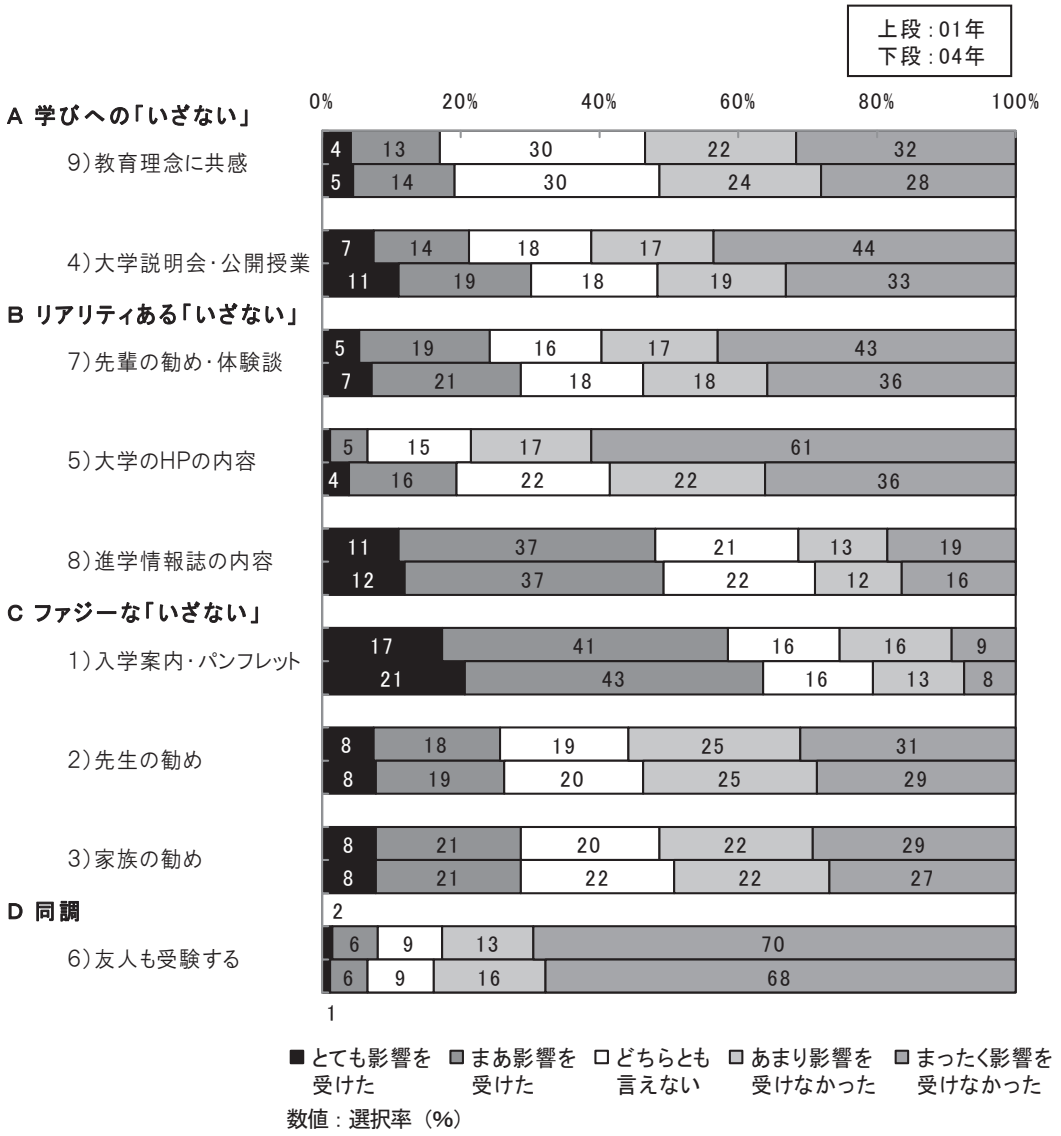
1. 2001 年調査との比較

データ２－20 は、大学・学部を決定する際に、各媒体（メディア）からどの程度の影響を受けたのかについて、2001・2004 年の両調査の結果を対比したものである。

２回の調査に共通して影響の強いものは「１．入学案内・パンフレット」「８．進学情報誌の内容」などの紙媒体である。

一方、数値自体は前述の両者に比べればまだ低いものの、2001 年から 2004 年で数値の「伸び」が大きいものは、「４．大学説明会・公開授業」「７．先輩の勧め・体験談」「５．大学ＨＰ（ホームページ）の内容」などである。「紙」以外の多様な場・媒体を通じて、受験生が自らにとって有益な情報をキャッチするようになってきていることが確認できる。また、説明会や体験談など「生（ナマ）」の情報の影

データ2－20　大学・学部決定時に影響を受けたもの　2001 年 VS 2004 年



響が大きくなってきていることは、入学後の大学生活に対する動機づけやミスマッチ防止の観点からも評価されてよいだろう。

2. 学部系統別の過年度比較

データ２－21 は、学部系統別に 2001 年と 2004 年の影響度をまとめたものである。

「９．教育理念に共感」「４．大学説明会・公開授業」から影響を受けている度合いは、**①人社外系統、③総合系統、④医歯薬系統**で比較的高い数値を示している。**③総合系統**では「７．先輩の勧め・体験談」も高く、生（ナマ）の具体的な情報を重視する傾向がうかがえる。

一方で、**②法経系統**や**⑤理工農系統**では特に「４．大学説明会・公開授業」から受ける影響が他の学部系統よりも低い。「７.先輩の勧め・体験談」の影響も強くなく、「本物・実物（人）」からの動機づけが成功しているとは言い難い状況である。

「５．大学ＨＰの内容」は、**⑤理工農系統**で比較的影響を与えているようである。**④医歯薬系統**では「３．家族の勧め」の影響も大きい。

3. 入学後の大学満足度との関係

大学・学部選択時に何から影響を強く受けると、入学後の大学満足度が高まるのだろうか。**データ２－22** は、各媒体（メディア）から受けた影響の大きさを、入学後の大学満足度の高いグループ（以下、高位群）と低いグループ（以下、低位群）で比較した。

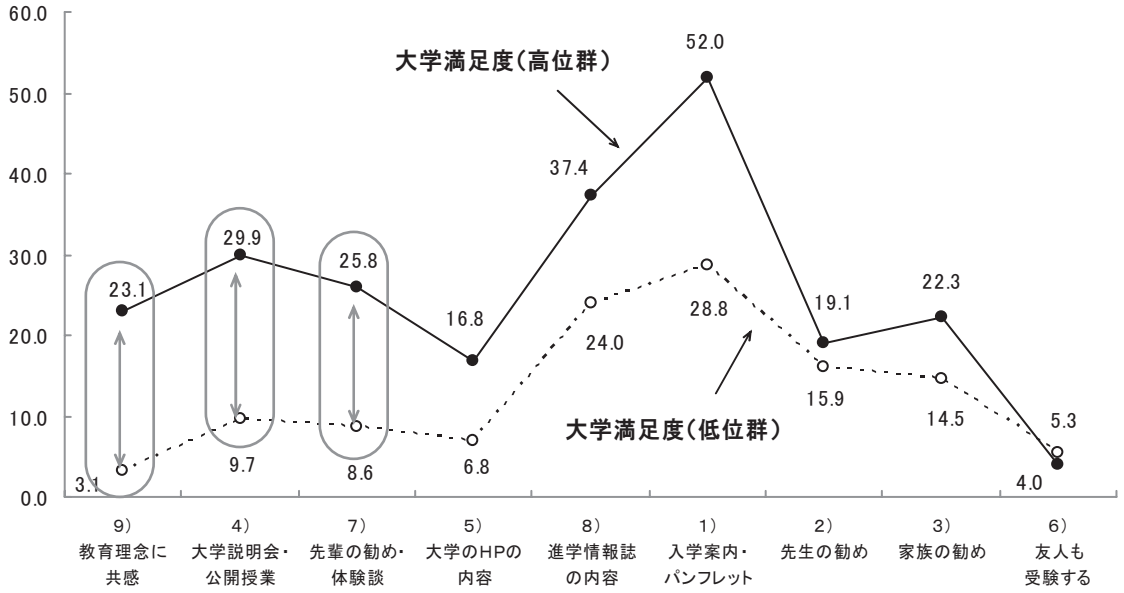
これを見ると、高位群は低位群に比べ、全体的に各媒体からの情報に強く影響を受けていることが分かる。おそらく情報を自分自身に引きつけて考える姿勢が強いのではないだろうか。媒体間における影響の強さの順位は高位群と低位群とでほぼ同一であるものの、高位群の数値と低位群の数値の差の開き方は

データ2－21 大学・学部決定時に影響を受けたもの ー 学部系統別 過年度比較

	2001年						2004年						全体増加率
	①人社外	②法経	③総合	④医歯薬	⑤理工農	全体	全体	①人社外	②法経	③総合	④医歯薬	⑤理工農	
9 教育理念に共感	11.7	10.2	11.5	10.6	8.2	10.6	11.8	13.3	10.2	12.3	12.8	9.7	1.11
4 大学説明会・公開授業	15.6	12.2	15.9	16.0	12.3	14.4	20.6	23.3	16.2	23.4	21.7	16.9	1.43
A 学びへの「いざない」	13.7	11.2	13.7	13.3	10.3	12.5	16.2	18.3	13.2	17.8	17.3	13.3	1.30
7 先輩の勧め・体験談	16.3	14.6	16.8	13.8	12.1	14.9	17.8	18.8	16.0	21.2	17.9	14.1	1.20
5 大学のHPの内容	3.9	3.6	3.6	3.2	4.5	3.9	11.6	11.6	9.5	12.1	11.8	13.1	2.98
8 進学情報誌の内容	31.0	29.3	29.4	28.3	28.9	29.7	30.5	32.3	31.2	29.9	28.9	28.5	1.03
B リアリティーある「いざない」	17.1	15.8	16.6	15.1	15.2	16.2	20.0	20.9	18.9	21.1	19.5	18.6	1.23
1 入学案内・パンフレット	42.1	35.6	40.6	35.1	33.4	37.9	42.1	47.6	37.7	42.9	38.5	37.8	1.11
2 先生の勧め	17.2	17.5	15.8	15.1	16.9	16.7	17.1	16.8	17.3	18.1	14.4	17.5	1.02
3 家族の勧め	17.7	20.4	17.7	21.7	14.8	18.2	18.2	17.3	19.9	18.8	23.4	15.3	1.00
C ファジーな「いざない」	25.6	24.5	24.7	24.0	21.7	24.3	25.8	27.2	25.0	26.6	25.4	23.5	1.06
D 同調 6 友人も受験	4.3	6.1	4.6	3.5	5.5	4.9	3.9	4.5	4.6	3.0	2.6	4.0	0.81
以上9項目の計	159.6	149.3	155.8	147.2	136.4	151.2	173.7	185.5	162.8	181.8	172.1	156.9	1.15

〔注１〕数値は、とても影響を受けた（%）＋まあ影響を受けた（%）×0.5
〔注２〕全体増加率は、2004年の全体÷2001年の全体で算出した。

データ2－22 大学・学部決定時に影響を受けたもの
－ 大学満足度 高位群と低位群の比較



〔注１〕数値：「とても影響を受けた（%）」＋「まあ影響を受けた（%）×0.5」
〔注２〕大学満足度（高位群）＝大学総合満足度について「とても満足」とした学生を集計対象とした。
〔注３〕大学満足度（低位群）＝大学総合満足度について「まったく満足していない」とした学生を集計対象とした。

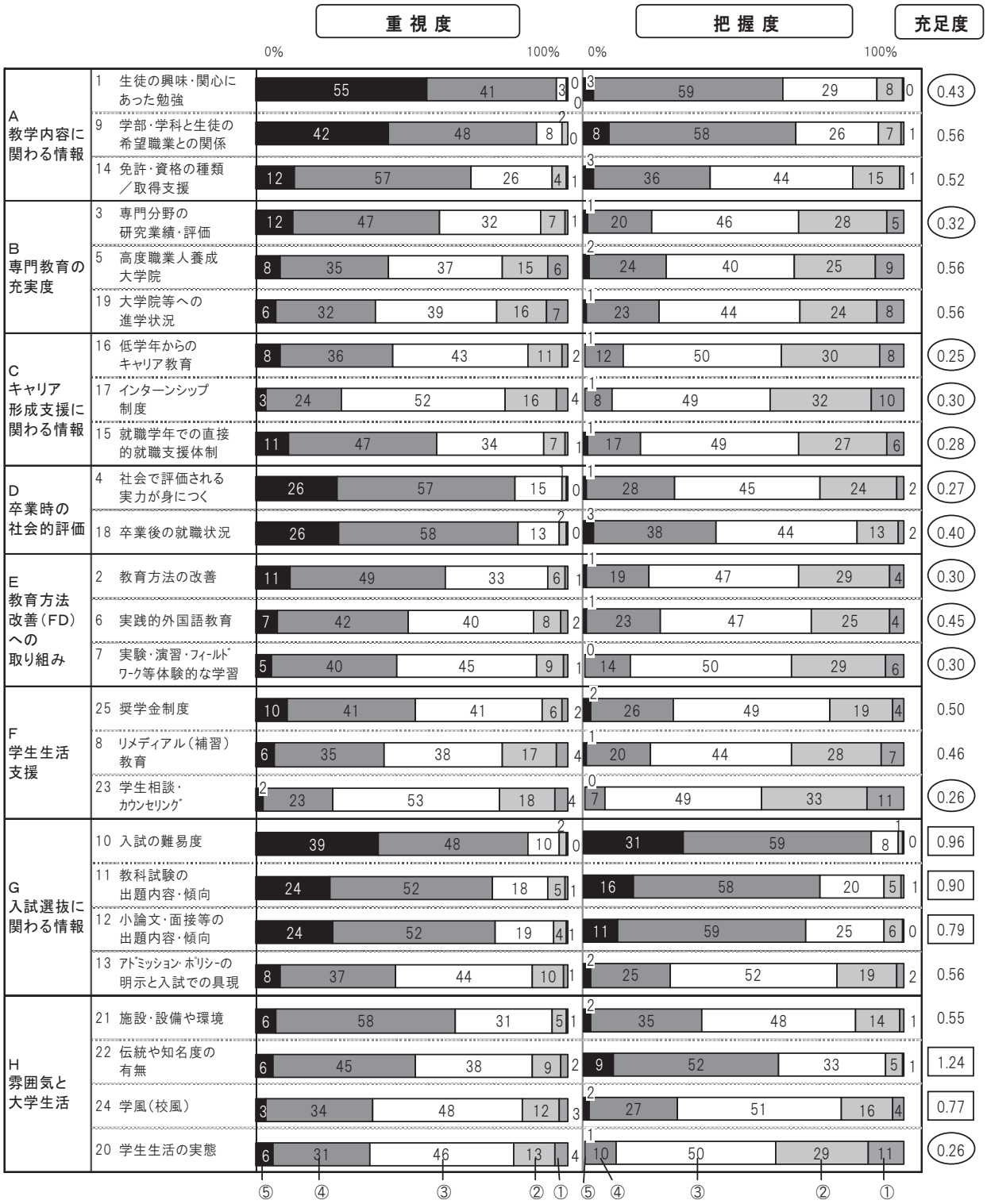
媒体間で異なる。高位群の数値が低位群の数値の３倍以上(格差が大きい)になったのは、「９．教育理念に共感（高位群 23.1／低位群 3.1：7.4 倍)」「４．大学説明会・公開授業（高位群 29.9／低位群 9.7：3.1 倍)」「７．先輩の勧め・体験談（高位群 25.8／低位群 8.6：3.0 倍)」などである。実際に大学を訪問し授業を経験する、在学生の体験談から学ぶなど、本物に触れて感じ、考えることの重要性がうかがえる。

第4節 高校教師が生徒に大学を勧める基準

高校教師は、自校の生徒に進学先の大学を勧めるにあたって何を重視しているのだろうか。第1節でも取り上げた高校教師対象の調査(2004 年度実施)の結果から紹介したい。

データ２－23 は、大学・短大志望者に対するこれからの進路指導において「何を重視して進学先を勧めたいか(重視度)」、「その情報をどの程度把握できているか（把握度)」を質問した結果である。重視度に対する把握度も算出し「充足度」という形で併記した。

データ2－23 高校教師の大学・短大選択における指導基準



凡　例	⑤	④	③	②	①
重視度	とても重視する	まあ重視する	どちらともいえない	あまり重視しない	ほとんど重視しない
把握度	把握できている	まあ把握できている	どちらともいえない	あまり把握できていない	ほとんど把握できていない

・充足度：把握度（把握できている％＋まあ把握できている％×0.5）÷重視度（重視している％＋まあ重視している％×0.5）

□ ◯ は、全25項目の平均値（0.51）より±10％以上の差が生じた値。

・ベネッセ教育総研「高等学校の進路指導に関する意識調査」（2004年6・7月）進路指導担当高校教師 n=1,765

1. 重視度＝中身（学べる内容）＞出口（卒業時の評価）＞入口（入試）

最も重視度が高かったのは「A教学内容に関わる情報」のカテゴリの「1．生徒の興味・関心にあった勉強ができるかどうか（96％：とても＋まあ、以下同様）」「9．学部・学科と生徒の希望職業との関係／生徒が希望する職業につくには、どこに進学すればよいか（90％）」などで、9割を超えている。

次いで「D卒業時の社会的評価」のカテゴリで、具体的には「4．学生が社会に出るときに評価される実力（専門領域における知識や技術など）が身につく（83％）」「18．卒業後の就職状況（84％）」などである。

「G入試選抜に関わる情報」のカテゴリが、それに続く。「10. 入試の難易度（87％）」「11. 教科試験の出題内容・傾向（76％）」「12．小論文・面接等の出題内容・傾向（76％）」などである。

2. 把握度＝入口＞中身＞出口

情報の把握度については「G入試選抜に関わる情報」が最も高い。「10．入試の難易度」は90％が把握していると回答しており、重視度と把握度がほぼ一致している。

重視度が最も高かった「A教学内容に関わる情報」の把握度が次に高く、「1．生徒の興味・関心にあった勉強ができるかどうか」「9．学部・学科と生徒の希望職業との関係」ともに60％を超えている。

その一方で、「D卒業時の社会的評価」の把握度は30～40％程度と低く、重視度とのギャップが大きい。また、これらの卒業時の評価を「結果」とみなすと、「Cキャリア形成支援に関わる情報」は、そこに至る過程（プロセス）であると言えるのだが、その把握度は、さらに低い状況にある（9～18％）。

これら、進路・キャリア支援に関する項目群のうち、相対的に把握度が高いのは「18. 卒業後の就職状況（41％）」であるが、これはあくまで既に卒業した学生に関する（教育）実績である。大学側からこの点を公表・アピールすることはもちろん必要であるけれども、これから大学に進学する生徒のメリットを高校に訴求するためには、各大学が現在、もしくは今後、どのような考えに基づいてどのようなキャリア教育のプログラムを提供していくのか、についての情報提供が重要である。

第1節で確認したところでは、高校の進路指導においては今後、「マッチングの条件」そのものよりも、むしろ「職業観・勤労観の形成」や「生き方設計」などに重点が移っていくと予想される。高等学校でキャリア教育の取り組みが深化していけば、「出口だけを宣伝するような学校は勧めない（フリーアンサー）」の意見に代表されるような、単に定量的に分かりやすい情報のみで満足することなくそこに至る教育プログラムの優劣を吟味しようとする教師の増加が予想される。各大学においては、思い切って高校教師の審美眼向上を支援するつもりで、キャリア教育のプログラム（もちろん、学部教育全体の到達点を含む）の評価観点を積極的に高等学校に情報提供してみてはどうだろうか。確実に自校の評価の向上にも跳ね返ってくるであろう。

3. 情報の充足度

情報を「重視する度合い」に対する「把握できている度合い」の関係を知るために、「充足度（把握度／重視度）」を算出した（**データ2－23**）。

全25項目の充足度の平均値は0.51で、情報の「把握度」が「重視度」の半分程度にと

どまっていることが確認できた。特に「充足度」が低い項目は「Ｃキャリア形成支援に関わる情報」「Ｄ卒業時の社会的評価」「Ｅ教育方法改善（ＦＤ）への取り組み」の各カテゴリに集中しており、高等学校ではこれらの領域において情報の「不足感」が高いと考えられる。

一方、「Ｇ入試選抜に関わる情報」「Ｈ雰囲気と大学生活」のカテゴリに、充足度の高い項目が集中している。

4. 学校類型による違い

学校類型による重視度・把握度の違いを**データ２－24**に示した（学校類型は章末参照）。情報を単純にするため、各カテゴリごとの平均値をプロットしている（横軸に把握度、縦軸に重視度）。

● Ａ教学内容に関わる情報

全ての学校類型において、大学・短大の選択基準として教師から最も重視されている情報である（重視度：60 ポイント前後）。しかし、把握度については 30 ポイント前後であり、重視度とのギャップが大きい。フリーアンサーに見られた高校教師の声として、「個々の大学から発信される情報量は増えているものの、客観的な基準での比較・検討が難しい」、「情報過多だが信頼できる客観的な情報ソース、情報量がともに不足している」などが見られた。学生の志向性別の授業満足度の数値化・指標化など、多面的に比較・検討が可能な情報へのニーズがあると考えられる。

● Ｂ専門教育の充実度

学校類型間での重視度の違いが目立って大きい（Ａ校群 51. 7、専門学科 18. 0）。特に重視度が突出して高いＡ校群に対しては、大学院も含めた教育・研究内容の方針・体制や実績など、そのニーズに応える情報提供が歓迎されるであろう。

● Ｃキャリア形成支援に関わる情報／Ｄ卒業時の社会的評価

「Ｄ卒業時の社会的評価（出口）」の重視度は、教学内容に次いで高い（55 ポイント前後）。一方で「Ｃキャリア形成支援に関わる情報」は重視度・把握度ともに低い。現段階では、高等学校で評価の観点が充分に持てていないのではないかと考えられる。

視点を変えて考えてみると、各大学からどのような取り組みが学生の意識行動改善に有効だったのかを積極的に高校にアピールしていけば、フロントランナーとして自大学の印象を好転させられるチャンスのある状態だと言える。Ｃ、Ｄの両カテゴリとも多様校群、総合学科、専門学科での重視度が相対的に高い。

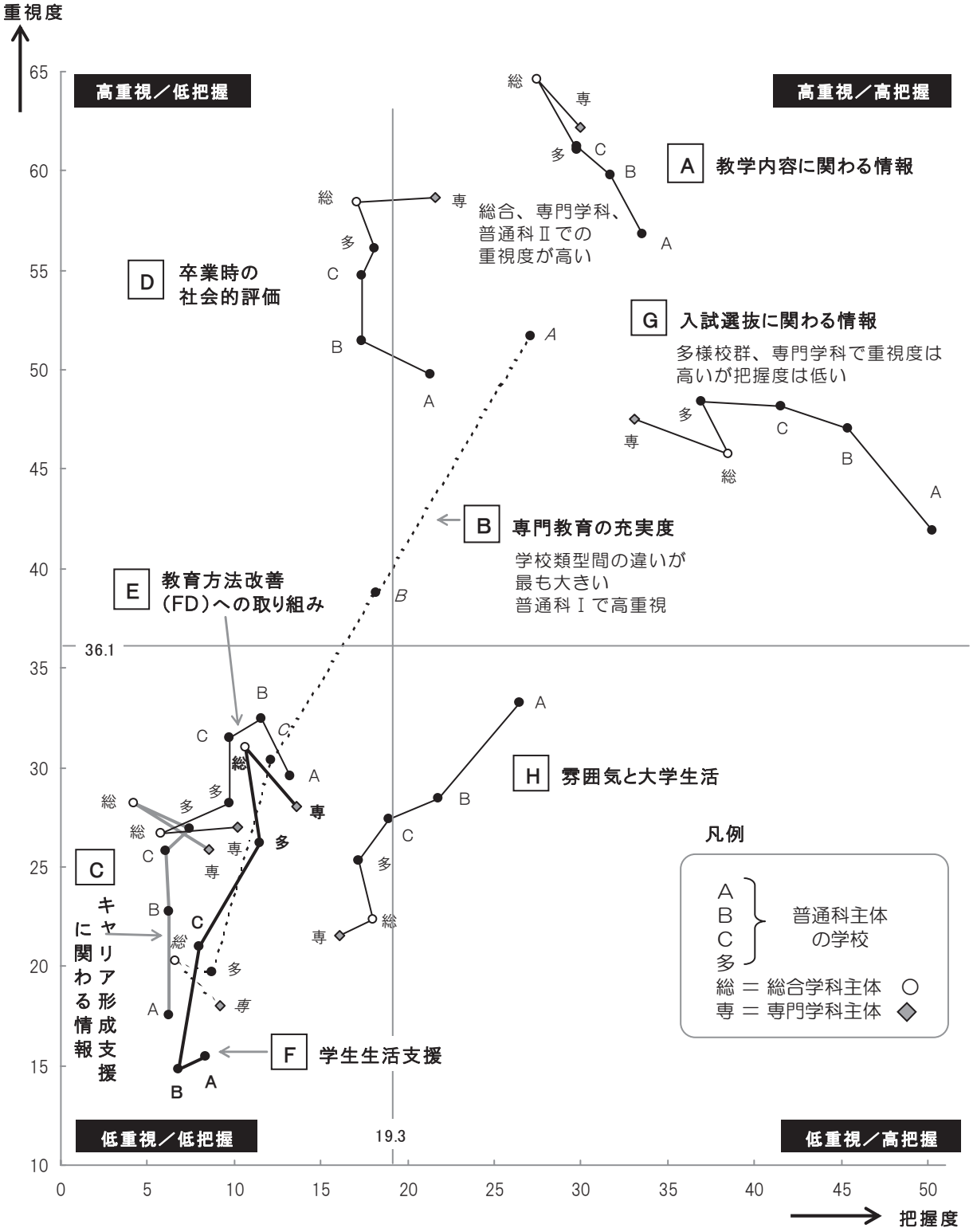
● Ｅ教育方法改善（ＦＤ）への取り組み

重視度（30 ポイント前後）に比べて把握度が低い（10 ポイント前後）。重視度はＡ・Ｂ・Ｃ校群で相対的に高い。今回の大学満足度調査では、大学・学部間での評価の違いが大きい項目でもあり、大学選びの指標としての重要性は今後増してくるのではないかと考えている。

● Ｆ学生生活支援

Ａ・Ｂ校群での重視度は低い（15 ポイント前後）一方で、多様校群や専門学科、総合学科での重視度が相対的に高い（27 ポイント前後）。

データ2－24 高校教師の大学・短大選択における指導基準（学校類型別グラフ）



縦軸： 重視度（とても重視する％＋まあ重視する％×0.5）
横軸： 把握度（把握できている％＋まあ把握できている％×0.5）
データ2-23 A～Hのカテゴリ平均値を学校類型ごとにプロット／重視度の36.1、把握度の19.3は全25項目の平均値。
学校類型区分については章末を参照。

● Ｇ入試選抜に関する情報

「Ａ教学内容に関わる情報」「Ｄ卒業時の社会的評価」に次いで重視度が高い（45 ポイント前後）。情報の把握度については最も高いカテゴリである（40 ポイント前後）。

内訳を確認すると、「11. 教科試験の内容・傾向」はＡ・Ｂ校群での把握度が高い（Ａ校群 60.9、Ｂ校群 54.2、Ｃ校群 47.6、多様校 39.9、総合学科 38.9、専門学科 33.2：把握度）。また、「12. 小論文・面接」などカリキュラム・フリー型入試情報の重視度（≒ニーズ）は、Ｃ校群や多様校、総合学科、専門学科などで強い（Ａ校群 39.2、Ｂ校群 45.8、Ｃ校群 50.2、多様校 53.7、総合学科 50.0、専門学科 55.5：重視度）。

全体的に、多様校群や専門学科でニーズが高いにもかかわらず情報が把握されていない状況が確認できた。

● Ｈ雰囲気と大学生活

重視度のカテゴリ平均値は 25 ポイント前後である。Ａ校群で相対的に重視されており、かつ情報も把握されている。フリーアンサーには「卒業生がもたらす情報」「生徒や教師がオープンキャンパスで実際に感じた雰囲気」「訪問してくる大学の先生の所属大学への想いが感じられることや、その大学の学生の状況を正しくとらえられているか」など、直接的に確認できる情報源を重視している旨の回答が多く見られた。

5. フリーアンサーの内容

調査項目に設定した 25 項目の他に、高校教師が生徒に進学先を勧めるにあたって重視している事項を知るためにフリーアンサーの記入を依頼した。以下に、主な記入内容を記載する。なお、内容を整理して把握する目的でいくつかのカテゴリを設定した。

特に記入件数が多かったものは、【Ａ】①自校の卒業生から得られる情報、【Ｃ】①立地条件・生活環境、【Ｄ】①本人の興味・希望・適性、などである。

【A】学生生活の実態･学生の様子

① **自校の卒業生から得られる情報**：卒業生が進学しているか、入学後その大学にどういう評価をしているか／卒業生の満足度・評価、追跡調査／自校の卒業生に学生生活の内容を聞く

② **学生生活・学生の雰囲気、実態**：入学してくる学生の質、及び入学後の学生の変化／雰囲気がその生徒に合うかどうか／与えられた内容だけに満足せず、サークル活動等にも積極的に参加しコミュニケーション能力を高めるよう、サークル活動も盛んなところ／活気があるかどうか

【B】直接的な印象

① **教職員の熱心さ・面倒見のよさ**：大学の先生の自分が所属している大学への思い、学生の状況を正しくとらえているか／入学生を育てよう！という意欲を感じる学校／大学･短大からの担当者の対応、熱意の有無。卒業生の動向を知らせてくれるかどうかなど

② **オープンキャンパス等の重視**：生徒には大学見学やオープンキャンパス、体験入学などを強く勧める／オープンキャンパスへの参加や本校の先輩と連絡をとって生の情報を多く得るよう指導している

③ **高等学校とのコミュニケーション**：情報の公開度、高校への発信度（高い大学は信用できます）。高校への一方通行ではなく、高校側の意見をきちんと聞く耳をもっている大学

【C】地理的要因･経済的要因

① **立地条件・生活環境**：通学圏内にあるか否か／近年「地理的条件」を重要視している保護者、生徒が増加／大学のある地域の物価や生活費など／アパート、寮等の様子をしっかり調べたい

② **授業料・奨学金**：授業料、入学金の全額の大きさ／特待生制度、奨学金の有無／家庭の経済状況／学費がその教育に見合っているかどうか

【D】教学内容/教員･講座･ゼミの情報

① **本人の興味・希望・適性**：生徒本人の興味・関心・適性・志望・能力・生き方など／大学で何を勉強したいか、そして、どのような仕事につきたいか（大学の学問を生かして）／ゼミや卒論の内容と本人の興味分野の合致／学問の場を求めているのか、就職の為の学校選びをしているのか生徒の内面の把握が難しい／大学、短大は学問をしに行くところだと思っています。自分が何について研究を深めたいのかが重要であり、そのような学校選びができる様に指導をしているつもりです。きちんとした大学（短大）生活を送り、しっかりとした研究ができれば仕事はついてくるものだと思います

② **教員・講座・ゼミの情報**：その大学にどのような世界に通ずる論文を書き、研究を実践している教授がいるのか。生徒に教える工夫をどう行っているか／その大学が得意としている学問分野や研究者／生徒の希望分野を研究している教授がいて、そのゼミなどが充実しているか

③ **学問的実力養成**：理系進学の生徒については大学院まで進む者が多い。大学の４年はトレーニング期間。①大学４年でどれだけの力がつくのか②大学院の進学先・人数、が知りたい／社会の求めるものにのみ迎合するのでなく基本的な勉学姿勢を学生に要求し、十分な実力を養成する熱意や環境が備わっている大学を選ぶようすすめている。

④ **教養教育の充実**：一般教養教育をしっかり実施してくれる大学を望む。人間的な幅と深みを養うことは大学生として重要

⑤ **資格取得の状況**

【E】教育方法改善（FD）、規模･学生と教員との関係

① **教育方法の改善**：語学を重視しているか。また落第をさせるなど、生徒、学生をよく学ばせる仕組みを作っているかどうか／教官が生徒（学生）の学問的興味や適性を充分把握して教育（授業）を行なっているか。又、教官の学生指導への意識改革ができているか否か

② **規模・学生と教員との関係**：教員と学生の比率／大学の規模、授業形態（ゼミ）などが本人に合っているかどうかなど／先生との関係

【F】卒業後の進路、就職（支援）状況

① 卒業後の進路／就職活動への学校としての支援状況、就職率等の実績／大学、短大、卒業後のフリーター率／実社会で活躍している人をどれくらい輩出しているか等／Ｕターン就職の状況

【G】入試

① **入試方式、難易度**：指定校推薦で受験できるかどうか／専門高校枠の有無／工業高校からは（１）ＡＯや特技推薦などの入試方法、（２）入学できても進級、卒業が可能な学力の持ち主かどうか

② **アドミッション・ポリシー**：学部、学科（コース）で研究、学習を深めるた

めの適性資質を知りたいが（重視したいが)、その具体的な要望、人物像などの情報が少ない

【H】その他

① **本人が続けられるか**：４年間（２年間）学校を続けられるか。（中退が多いから）／学力面で不足することが多いので大学での学習についていけるか。経済的に続けられるかどうか／大学進学が容易になり、安易な進学と入学後の進路変更が増えている。経済的負担が増すので進学について目的意識をしっかり持たせる

② **専門学校との違い**：専門学校との差。大学が専門学校の後追いをするような傾向がみられて情けない／大学や短大が専門学校より価値があると信じている

③ **大学の改革状況**

④ **保護者の意向**

⑤ **大学の社会的評価**　　など

参考

本章の第１節・第４節に用いた高校教師調査の概要を下に記す。

○調査名称
「高等学校の進路指導に関する意識調査」
○調査対象
全国の高等学校の進路指導ご担当先生
調査依頼校 5,073 校／有効回答数 1,765 校
(回答率 34.8%)
○調査時期　2004 年６～７月
○調査方法　質問紙を郵送
○調査主体　ベネッセ教育総研

※　調査結果の詳細については報告書「高等学校の進路指導に関する意識調査」（ベネッセ教育総研 2004 年９月刊）を参照されたい。

学校類型区分の設定と区分別回答校数

分析の便宜上、学科構成や卒業後の進路状況等により学校類型を設定しています。本文中では場合により省略した表記も使用しています。

区分1	普通科Ⅰ		普通科Ⅱ		総合学科	専門学科
区分2	進学重点校 A群	進学重点校 B群	進学重点校 C群	進路多様校群		
定 義	普通科・英語科・理数科等を主体とする学校（定員の６割以上）				総合学科が主体の学校（定員の６割以上）	専門学科が主体の学校（定員の６割以上）
	ほとんど全員が４年制大学へ進学		４年制大学進学者が半数程度以上	４年制大学進学者は半数程度以下		
	進研模試＊ ss58以上の占有率６割以上	進研模試＊ ss48以上の占有率６割以上				
回答数	97校 (5.5%)	371校 (21.0%)	328校 (18.6%)	617校 (35.0%)	67校 (3.8%)	285校 (16.1%)

＊２年生11月回３教科総合偏差値を基準に使用。未受験校については、他の指標より推定。